

成人期への移行出来事のタイミングと順序 ——出生コーホート間比較にみる連続性と変化——

安藤 由美
(琉球大学)

The Timing and Order of Events in the Transition to Adulthood:
Its Continuity and Change in Birth-Cohort Comparisons
ANDO, Yoshimi

成人期への移行出来事のタイミングと順序を出生コーホート間およびコーホート内比較を通して観察した結果、次のような歴史的連続性と変化とが観察された。すなわち、戦後 50 余年にわたって、卒業—就職—結婚という順序が一貫して標準的であった。また、出身階層が高いほど離家が卒業・就職と同調し、逆に出身階層が低いほどそれが結婚と同調する傾向が強かった。一方、戦後の高学歴化にともなって卒業および就職年齢が上昇した。高度経済成長期において卒業と就職の同調が一般化し、さらに中卒者層ではこれに離家が伴った。高度成長終焉以降に成人期を迎えたコーホートでは、結婚まで親元にとどまる傾向が強まった。

キーワード：成人期への移行、出生コーホート分析、イベント・ヒストリー・データ

1. 問題の所在

(1) 目的

本章の目的は、全国家族調査データ（以下、NFR98 データ）より作成したイベント・ヒストリー・データを用いて、成人期への移行出来事のタイミングと順序における、歴史的連続性および変化を出生コーホート間比較によって明らかにすることにある。この作業は、わが国における家族発達と家族以外の制度領域との関連の、20 世紀を通じた連続性と変化について考察するための基礎的な資料を提供すると考える⁽¹⁾。ここでは、タイミングとは出来事を経験した暦年齢 *chronological age* のことである⁽²⁾。

(2) 視点

本章の関心は、第一に個人のライフコースにおける成人期への移行そのものにある。成人期への移行はライフコース研究において常に重要な研究対象であり続けてきた。そこでは、個人の加齢過程が社会構造や歴史的条件的影響を受けて展開するという前提に立ち、成人期への移行をプロセスとしてとらえ、それを構成する出来事のタイミングや順序の記述・分析が行われてきた (Modell et al., 1978 ; Hogan, 1981 ; Hogan & Mochizuki, 1985 ; 森岡・青井, 1987 ; 正岡ほか, 1990 & 1991 ; 安藤, 1998)。

本章はまた、成人期への移行という個人のライフコースに属する現象を通して、家族発達および家族以外の諸制度領域との関係を第二の関心としている。家族の発達において、成員が定位家族から自立する局面が重要であることはいうまでもないが、それは単一の出来事ではなく、むしろ卒業・就職・離家・結婚・出産といった出来事の経過としてとらえることにより移行過程として、また、それをとりまく社会構造や歴史的条件的影響との関連で理解することが可能となる (Elder, 1985 ; White, 1991 ; Jones and Wallace, 1992)。

(3)ねらい

第二次大戦をはさんだ激動の時代、高度経済成長から低成長時代にいたる経済変動の時代のなかで成人期への移行を迎えた人たちの、移行行動はどのようなものであったのか。時代的なコンテクストは出生コーホートによってどのように異なっていたのか。社会経済層や家族的背景の違いは、出生コーホート内にどのような経験の違いをもたらしたのか。上述の視点に立って、しかも全国サンプルを使いながら、こうした事実を記述することが、本章におけるリサーチ・クエスチョンということになる。そして、このような、個人の移行と家族発達キャリアの交差と、その社会的・歴史的コンテクストとの関係をおさえるという課題は、全国家族調査と銘打った当研究プロジェクトにおいても重要な意味をもつ⁽³⁾。

2. データと方法

個々の分析テーマごとの方法の詳細はその都度述べるとして、ここでは本章全体に共通する部分を示しておく。

分析の対象とするサンプルは、後述の出来事変数の欠損値を除外した、基本的にはNFR98の全対象者であるが、これを1920年代(1921～30)生まれから1960年代(1961～70)までの5つの10年刻み出生コーホートに分けて、コーホート別、男女別に比較を行う。コーホートの区分を、5年ごとのサンプリング・ユニットを2つずつ合わせたのは、たんにサンプル規模の制約による。なお、表記であるが、出生コーホートはたんに20s、30sと表し、時代を表すときは、たとえば1920年代などと「年代」を明示的につけることで区別したい。

成人期への移行出来事として取りあげるのは、卒業(中退も含む)、離家(初離家)、就職(初就職)、結婚(初婚)の4つである。ただし、結婚については、ほかの章と重複するので、タイミングの分析では簡単にあつかうにとどめる。また、先行研究では一般に親なり(子の出生)も成人期への移行に含めることがあるが、やはりこの出来事もほかの章で取りあげられていることと、順序の点では、親なりが結婚に先行するケースは全体としては少なかった(2.6%)、親なりは考察に含めなかった⁽⁴⁾。

NFR 調査においては、いずれの出来事タイミングも年次（何年に経験したか）での回答が優先されているので、大部分を占めるそのようなサンプルについては、経験年次から出生年次を減じて経験年齢を算出した値を使用した。しかしながら、経験タイミングを年齢で回答しているサンプルについては、年齢の値をそのまま使用した。この場合、年齢がどのように答えられているか、すなわち、本章の計算方式／満年齢／数え年のいずれかの判別はできないため、多少の誤差が含まれることは避けられない。なお、欠損値については、タイミング分析では個々の出来事ごとに欠損値を除外したが、順序分析ではすべての出来事が有効なサンプルのみを対象とした。

移行出来事のタイミングと順序の規定要因を調べるための独立変数としては、学歴（本人）、出身階層に加え、生殖家族要因として、きょうだい数、15 歳以前の父死亡有無の 4 変数を使用した。補足をしておくと、学歴は、初等／中等／高等の 3 カテゴリーであるが、各カテゴリーのサンプル数がコーホート・性別によっては分析にたえないくらい小さくなるのを避けるために、50s および 60s の初等は除外し、さらに女性については 20s および 30s の中等は高等に含めた。出身階層は父学歴と父職（本人 15 歳時）との合成変数を作成し、初等・自営・農林漁業／初等・自営・非農林漁業／初等・非自営／中等以上の 4 カテゴリーとした。この変数は順序尺度であることを想定している。きょうだい数は、1 人未満／2 人／3 人以上の 3 カテゴリーとした。15 歳以前の父死亡有無については、50s・60s では 15 歳以前に父親を亡くしたサンプルが 30 を割るコーホートがあるので、結果の判断はいちおう保留する必要がある⁽⁵⁾。

方法としては、出来事のタイミングについては、ライフコースなどの縦断的データの分析に多用されているイベント・ヒストリー分析と呼ばれる統計的分析手法に依拠しつつ（Mayer *et al.*, 1990；浜島, 2000）、先述の男女それぞれ 5 つの出生コーホート、計 10 のサブグループ間で、カプラン・マイヤー法による生存時間分布関数（Survival Distribution Function）を比較検討し、独立変数のカテゴリーごとに群間比較を行う。順序については、複数の出来事によるパターンをあらかじめ設定し、やはりサブグループ間での比較を行うとともに、独立変数とのクロス分析を行う。

以下、成人期への移行出来事のタイミング、順序の順に観察を進める。

3. 成人期への移行出来事のタイミング

(1) 出来事の生存時間分布のコーホート間比較

まず成人期への移行出来事のタイミングをコーホート間で比較し、その連続性と変化を検討することから始めよう。その主眼はコーホート・男女ごとの集合的な分布を知ることにある。そのための方法として、ここでは生存時間分布を調べ、中央値および四分位数を検討する。生存時間分布を得るにあたって、出来事の経験（生起）をエンドポイントとし

年齢ごとの生存確率（ x 歳までその出来事を経験しない確率）をカプラン・マイヤー法により計算した。このとき、未経験者は調査時点の年齢を値とし、打ち切りあり(censored)として処理した。ただし、離家については、経験する前に親が死亡した非該当者を、親を両方亡くした年齢を値とし、打ち切りあり(censored)として計算に含めた⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

それでは、成人期への移行出来事のタイミングを、卒業・就職・結婚・離家の順にみていこう。図 1 は 4 つの出来事の生存曲線を、表 1 は四分位数を示している。生存曲線図からは、出来事を経験年齢の分布だけでなく、集団ごとの普及度（Prevalence、観察終了時点での出来事経験者の割合）も知ることができる。また、広がり（Spread、集団がその出来事を経験するのに要する時間）については、曲線の傾きが大きいほど、コーホート内での広がりが小さいことを表す（Modell *et al.*, 1978）。

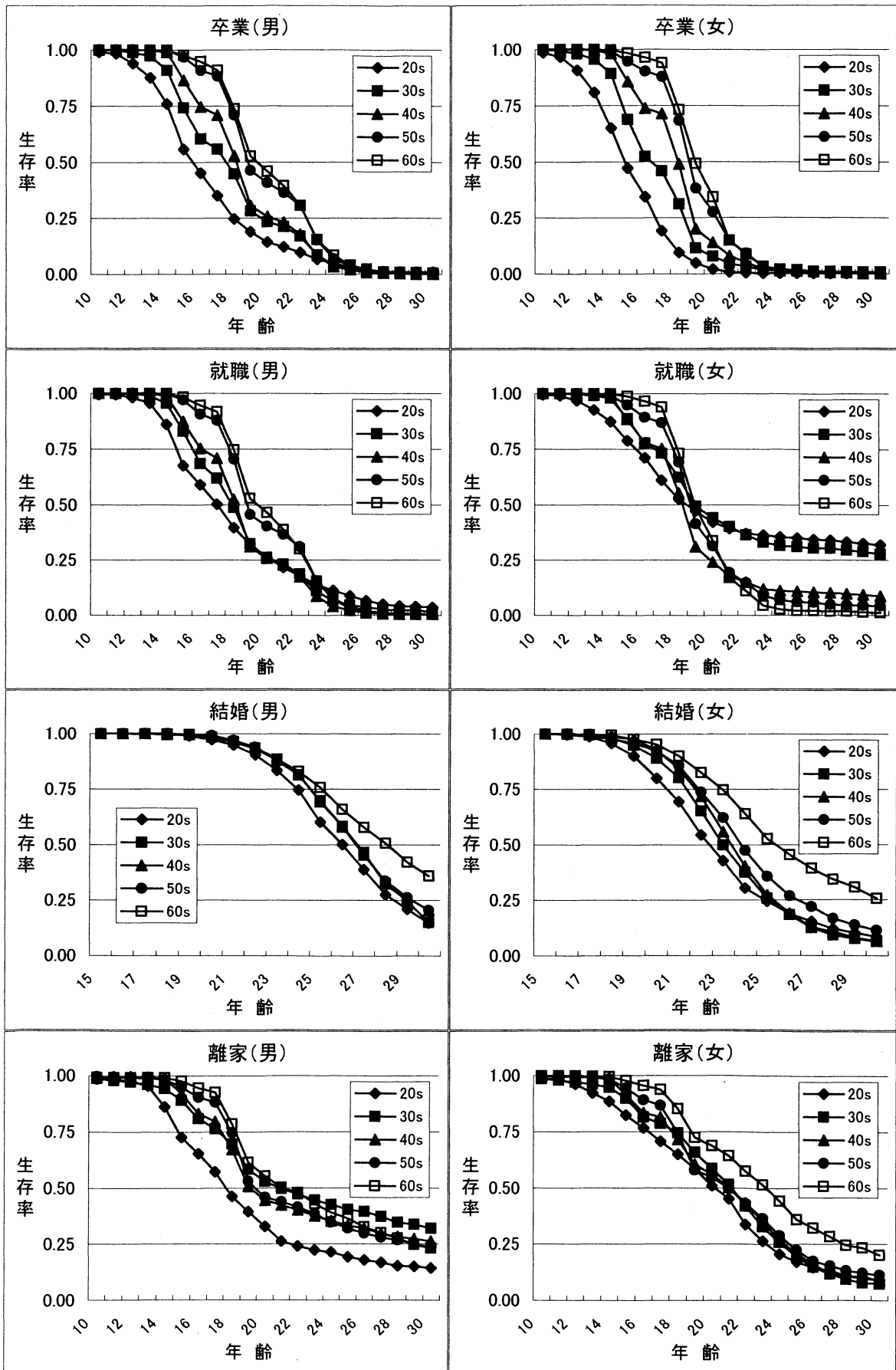
まず、卒業からみていくと、男女ともにコーホートが若くなるにつれて、曲線全体が右に移動している、すなわち卒業タイミングが遅くなっていることがわかる。中央値の推移で確かめると、20s から順に、男性は 16.0 歳、18.0 歳、19.0 歳、19.0 歳、20.0 歳、女性は 15.0 歳、17.0 歳、18.0 歳、19.0 歳、19.0 歳、となっている。このような上昇傾向は後述のようにコーホート間での高学歴化に対応している。また、卒業は、ほかの 3 つの出来事と異なり、ほぼすべての人が経験する出来事であることがあらためて確認される。もっとも、NFR 調査では、卒業・中退を区別していないので、正確に言えば就学した経験ということになる（なお、卒業タイミングの欠損値は約 1 %）。

表1 成人期への移行出来事タイミング

		コ ー ホ ー ト	N (人)	普及 率 (Un censo red)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)	平均 (Mean)			コ ー ホ ー ト	N (人)	普及 率 (Un censo red)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)	平均 (Mean)
卒業	男	20S	506	100.0	15.0	16.0	18.0	16.9	就職	男	20S	491	99.8	15.0	18.0	21.0	18.8
		30S	647	100.0	15.0	18.0	20.0	18.3			30S	634	99.8	16.0	18.0	21.0	19.0
		40S	787	100.0	16.0	19.0	21.0	18.9			40S	783	99.9	17.0	19.0	21.0	19.0
		50S	690	100.0	18.0	19.0	23.0	20.3			50S	691	100.0	18.0	19.0	23.0	20.3
		60S	669	100.0	18.0	20.0	23.0	20.6			60S	667	99.9	18.0	20.0	23.0	20.6
		計	6922	**,**,* ^{a)}							計	6792	**,**,* ^{a)}				
	女	20S	577	100.0	14.0	15.0	17.0	15.5		女	20S	540	83.7	16.0	19.0	39.5	29.6
		30S	686	100.0	15.0	17.0	19.0	17.2			30S	668	90.1	17.0	19.0	34.0	26.8
		40S	871	100.0	16.0	18.0	19.0	18.3			40S	853	97.3	18.0	19.0	20.0	20.7
		50S	751	100.0	18.0	19.0	21.0	19.4			50S	741	98.1	18.0	19.0	21.0	20.3
		60S	738	100.0	18.0	19.0	21.0	19.8			60S	724	99.3	18.0	19.0	21.0	19.9
		計	6903	**,**,* ^{a)}							計	6723	**,**,* ^{a)}				
結婚	男	20S	506	98.8	24.0	26.5	29.0	27.2	離家	男	20S	478	86.2	15.0	18.0	22.0	22.3
		30S	646	99.2	25.0	27.0	29.0	27.4			30S	616	70.5	18.0	21.0	-	26.3
		40S	783	95.0	25.0	27.0	30.0	28.9			40S	773	77.1	18.0	20.0	32.0	26.6
		50S	687	86.5	25.0	28.0	33.0	30.0			50S	686	79.9	18.0	20.0	30.0	24.9
		60S	668	67.5	26.0	29.0	35.0	29.6			60S	666	77.2	19.0	22.0	29.0	24.4
		計	6903	**,**,* ^{a)}							計	6723	**,**,* ^{a)}				
	女	20S	580	97.2	21.0	23.0	25.0	24.5		女	20S	540	92.6	17.0	21.0	24.0	22.2
		30S	688	96.8	22.0	23.0	26.0	24.6			30S	641	92.0	18.0	22.0	25.0	21.8
		40S	865	97.3	22.0	24.0	26.0	24.8			40S	850	92.4	18.0	22.0	25.0	22.6
		50S	748	94.7	22.0	24.0	27.0	25.5			50S	742	90.8	18.0	21.0	25.0	23.0
		60S	732	76.6	23.0	26.0	31.0	26.9			60S	731	80.0	19.0	24.0	28.0	24.6
		計	6903	**,**,* ^{a)}							計	6723	**,**,* ^{a)}				

a) 左から順に,Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す(* $p < .05$,** $p < .01$).

図1 成人期への移行出来事の生存率



つぎに、就職のタイミングであるが、生存曲線のプロフィールが男女でかなり異なるので、個別にみよう。男性では、ほぼ全員が経験し、またそのプロフィールは卒業と似通っている。中央値でコーホート間の推移を確認すると、20s から順に、18.0 歳、18.0 歳、19.0 歳、19.0 歳、20.0 歳となっている。

女性の場合は、一見して 20s および 30s の 2 つのコーホートと、残り 3 つのコーホートとのプロフィールに違いがみられる。すなわち、年長の 2 コーホートでは、必ずしも就職を全員が経験してはいない。ちなみに、これら 2 つのコーホートの、調査時点までに一度も働いたことがない人の比率は、20s が 15.0 %、30s が 9.5 % である。またこれら 2 つのコーホートでは、曲線がなだらかであり、このことから就職タイミングのばらつきが大きいことがわかる。このような違いから、中央値からみた場合、コーホート間での違いはほとんどないが、就職タイミングの集成的特徴には、かなりコーホート差がみられた。なお、既婚女性の就業には生殖家族や夫の属性が重要になってくるが、その変数はなく、また本章のテーマとは異なるので、今回は、結婚の有無にかかわらず、30 歳迄の経験をみた。

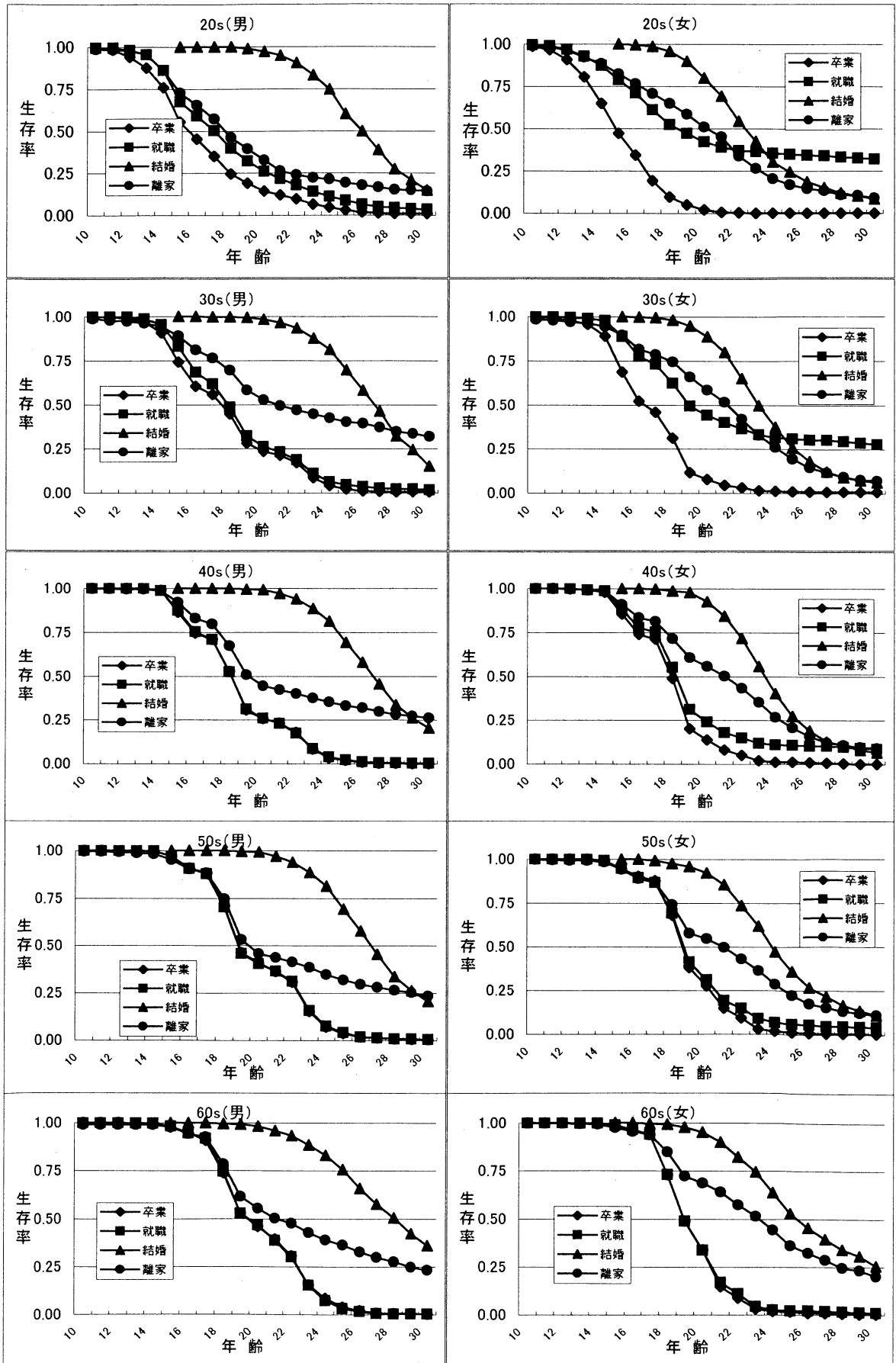
結婚のタイミングは、中央値での、男性 26.5 歳、27.0 歳、27.0 歳、28.0 歳、29.0 歳、女性 23.0 歳、23.0 歳、24.0 歳、24.0 歳、26.0 歳という推移からわかるように、男女ともにコーホート間で遅くなっており、生存曲線のプロファイルからもそのことは確認できる。このような変化は、人口統計でもすでに明らかになっている、いわゆる晩婚化を反映している。

最後に、離家のタイミングをみよう。この出来事は、ほかの 3 つの出来事とはかなり変化の様子が異なっている。まず女性から述べよう。中央値の推移からみると、20s から 21.0 歳、22.0 歳、22.0 歳、21.0 歳、24.0 歳というように、50s までは大きな変化が認められないが、60s はほかと比べて一段と遅い。プロフィールでも、60s の調査時点までの普及度はほかのコーホートに比して低い。このように、女性の場合は、50s と 60s の間で、離家タイミングの大きな遅れが生じたといえる。

一方男性の場合、コーホート間での変化は、これまでみてきたような、一方向的な変化ではない。まず、プロフィールをみてわかるように、20s、30s、40s+50s+60s という 3 つの異なる傾向を指摘することができる。一番年長の 20s は中央値では 18 歳と一番低い。ところが、次の 30s は 21 歳となり、これに続く 3 つのコーホートも同様の値を示す。つまり、20s と 30s 以降で大きな違いがみられる。さらに、30s は、ほかのコーホートに比して、20 歳代以降の経験が少ないことがプロフィールからわかる。

30s 男性の離家がなぜこのような傾向を示すかについて、現在の手持ちのデータからは明らかにできないが、若干指摘できることがある。それは、離家経験なしの内訳をみると、20s では親が死亡したために離家することがなかった、つまり非該当ケースがほとんどを占めるのに対し、30s では 3 人に 1 人は親がどちらか健在で、まだ離家を経験していない、

図2 成人期への移行出来事の生存率(その2)



未経験ケースである。それと、コーホート全体に占める非該当ケースの割合は、20sの16.4%に対し、30sは20.8%で、後者が若干多い。推測するに、30sコーホートの親たちは、20sコーホートの親たちよりも、平均的に早く死亡した可能性が伺われる。そのことに加えて、なんらかの親元にとどまらせる条件が20sコーホートよりも30sコーホートに対して強く働いたことである。その間接的な要因として、戦争を中心とする歴史的状況、戦後の人口学的条件の変化などを考えることは根拠なしとしない。というのも、2つのコーホートが離家した年代をみると、中央値を中心に半数が離家したのは、20sは終戦前であり、30sが1950年代であったからである。いずれにしても、この問題に答えるには、親の死亡タイミングとの関連などもみる必要があり、今後の分析を待つしかない。

さて、これまで個別にみてきた出来事相互の関連はどうなっているだろうか。順序については後段で詳しく分析するとして、ここでは、4つの出来事の生存曲線をコーホートごとに重ね合わせてみることで、集合体水準での出来事間の関係をみておきたい。

図2にみるように、離家を別にすれば、卒業、就職、結婚の3つのできごとは、ほぼこの順序で経験されていることが、曲線の配置からうかがえる。そして、卒業と就職の2つは、男性では30s以降、女性では40s以降のコーホートにおいて、ほぼ重なっており、これらが同時かあるいはきわめて近接したタイミングで経験されていることが示されている。このことについては、出来事タイミングの規定要因の分析を行う際に、再度問題にしたい。

表2 卒業、学歴別

	コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile 50%ile 75%ile (Q1) (Med.) (Q3)			コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile 50%ile 75%ile (Q1) (Med.) (Q3)			
男	20s	初等	249	100.0	14.0	15.0	15.0	女	20s	初等	333	100.0	13.0	14.0	15.0
		中等	144	100.0	16.0	17.0	18.0			中等	219	100.0	16.0	17.0	18.0
		高等	87	100.0	20.0	23.0	25.0			高等 ^{b)}	-	-	-	-	-
		計	480	**,**,** ^{a)}						計	552	****,*			
	30s	初等	245	100.0	15.0	15.0	16.0	30s	初等	292	100.0	15.0	15.0	16.0	
		中等	250	100.0	18.0	18.0	19.0		中等	377	100.0	18.0	19.0	19.0	
		高等	143	100.0	22.0	23.0	24.0		高等	-	-	-	-	-	
		計	638	**,**,**					計	669	**,**,**				
	40s	初等	184	100.0	15.0	15.0	16.0	40s	初等	205	100.0	15.0	15.0	16.0	
		中等	374	100.0	18.0	19.0	19.0		中等	506	100.0	18.0	19.0	19.0	
		高等	212	100.0	22.0	23.0	24.0		高等	143	100.0	20.0	21.0	22.0	
		計	770	**,**,**					計	854	**,**,**				
50s	初等	-	-	-	-	-	50s	初等	-	-	-	-	-		
	中等	330	100.0	18.0	19.0	19.0		中等	429	100.0	18.0	19.0	19.0		
	高等	299	100.0	22.0	23.0	24.0		高等	251	100.0	20.0	21.0	22.0		
	計	629	**,**,**					計	680	**,**,n.s.					
60s	初等	-	-	-	-	-	60s	初等	-	-	-	-	-		
	中等	324	100.0	18.0	19.0	19.0		中等	396	100.0	18.0	19.0	19.0		
	高等	311	100.0	22.0	23.0	24.0		高等	319	100.0	20.0	21.0	22.0		
	計	635	**,**,*					計	715	**,**,n.s.					

a) 左から順に、Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す (* $p < .05$, ** $p < .01$).

b) 20s, 30s女性の高等は中等に含め、50s, 60sの初等は男女とも除外してある。

(2) タイミングの規定要因

前節でみたように、NFR 調査データにおいては、成人期への移行出来事のタイミングがコーホート間で少なからぬ変化をみせてきたことが明らかになった。では、社会構造や家族的背景の違いは、コーホート内にどのようなタイミングの違いをもたらしているだろうか。ここでは、前節で観察された成人期への移行出来事のタイミングをいくつかの独立変数とクロス分析を行うことにより、移行タイミングの規定要因について考察することが目的である。最初にも述べたように、独立変数は、出身階層、学歴、きょうだい数、15歳以前の父死亡有無の4つであるが、すべての出来事についてのクロス集計結果を提示するのは煩瑣になるし、また関連がみられないものもあったので、注目すべき傾向が見いだされたものについて、ここでは取りあげていく。

(a) 卒業・就職タイミングの規定要因：学歴

まず、卒業年齢が学歴によって分化していることを確認しておこう。図 3 および表 2 は学歴別の卒業年齢の分布を表している。中央値はほぼそれぞれの学歴の修了年齢に相当している。生存曲線プロフィールのほうでわかることは、全体的に曲線の傾きがきわめて強いので、大多数が制度で定められた年齢で学校を終わっていることが一目瞭然ではあるが、それでも、高等教育では幾分傾きが緩やか、いいかえれば広がり大きい。ここから、

表3 就職、学歴別

	コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)		コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)
男	20s	初等	237	99.6	15.0	15.0	18.0	女	20s	初等	312	82.4	15.0	18.0	41.0
		中等	141	100.0	17.0	18.0	19.0			中等	205	85.4	18.0	20.0	36.0
		高等	86	100.0	20.0	22.0	24.0			高等 ^{b)}	-	-	-	-	-
		計	464	***,n.s. ^{a)}						計	517	n.s.,**n.s.			
	30s	初等	237	99.6	15.0	16.0	17.0		30s	初等	287	90.9	16.0	18.0	34.0
		中等	246	100.0	18.0	19.0	19.0			中等	364	89.0	19.0	21.0	35.0
		高等	141	100.0	22.0	23.0	24.0			高等	-	-	-	-	-
		計	624	****						計	651	***,n.s.			
	40s	初等	183	99.5	15.0	16.0	16.0		40s	初等	200	96.0	15.0	16.0	17.0
		中等	372	100.0	18.0	19.0	19.0			中等	494	98.0	18.0	19.0	19.0
		高等	210	100.0	22.0	23.0	24.0			高等	141	96.5	20.0	21.0	23.0
		計	765	**,**,**						計	835	**,**,n.s.			
	50s	初等	-	-	-	-	-		50s	初等	-	-	-	-	-
		中等	330	100.0	18.0	19.0	19.0			中等	423	99.3	18.0	19.0	19.0
		高等	299	100.0	22.0	23.0	24.0			高等	249	97.6	20.0	21.0	23.0
		計	629	**,**,**						計	672	**,**,n.s.			
	60s	初等	-	-	-	-	-		60s	初等	-	-	-	-	-
		中等	323	100.0	18.0	19.0	19.0			中等	386	99.2	18.0	19.0	19.0
高等		310	99.7	22.0	23.0	24.0	高等	315		99.7	20.0	21.0	22.0		
計		633	****				計	701		**,**,n.s.					

a) 左から順に、Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す

(*p<.05,**p<.01).

b) 20s,30s女性の高等は中等に含め、50s,60sの初等は男女とも除外してある。

図3 学歴別、卒業の生存率

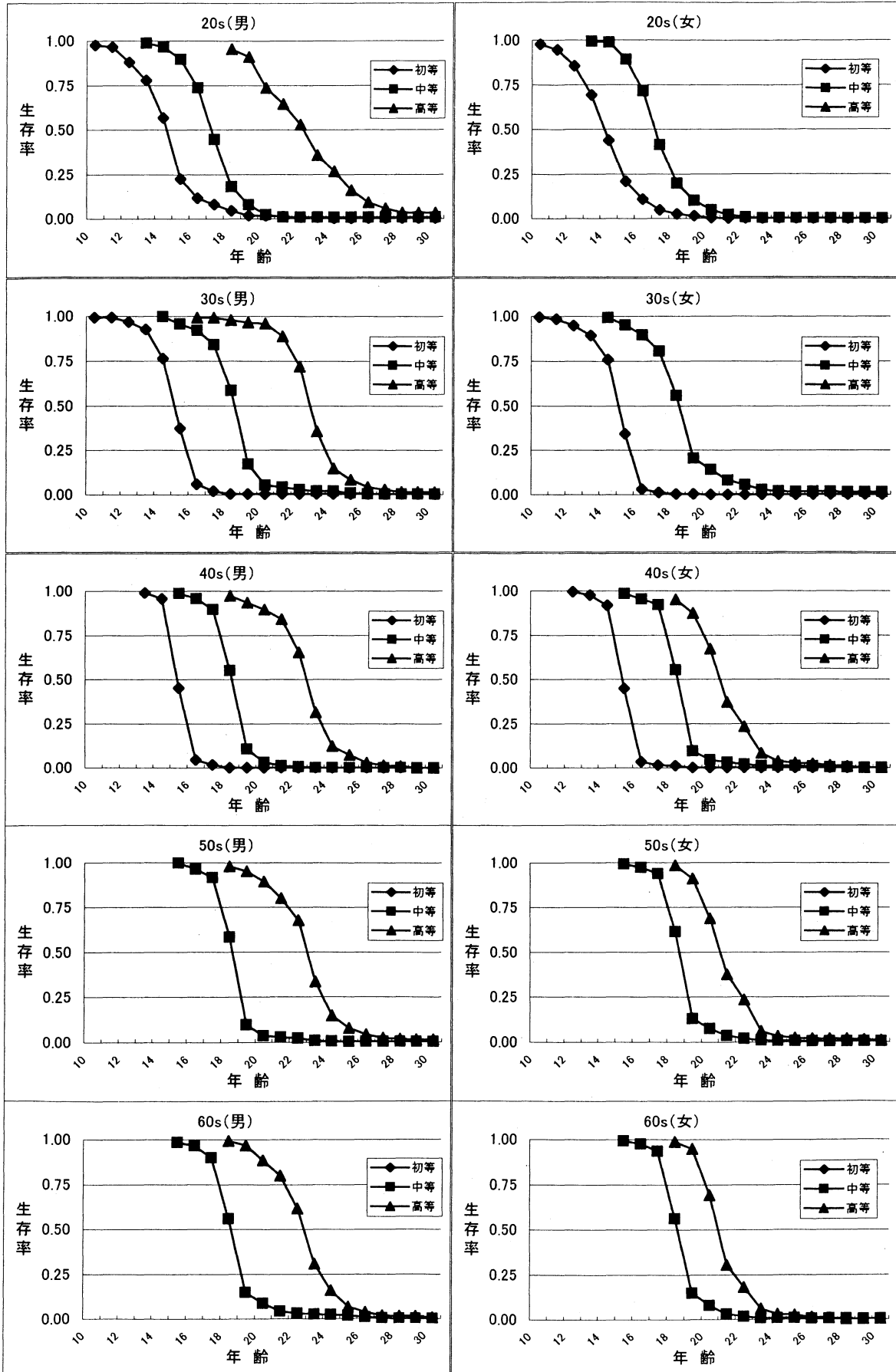
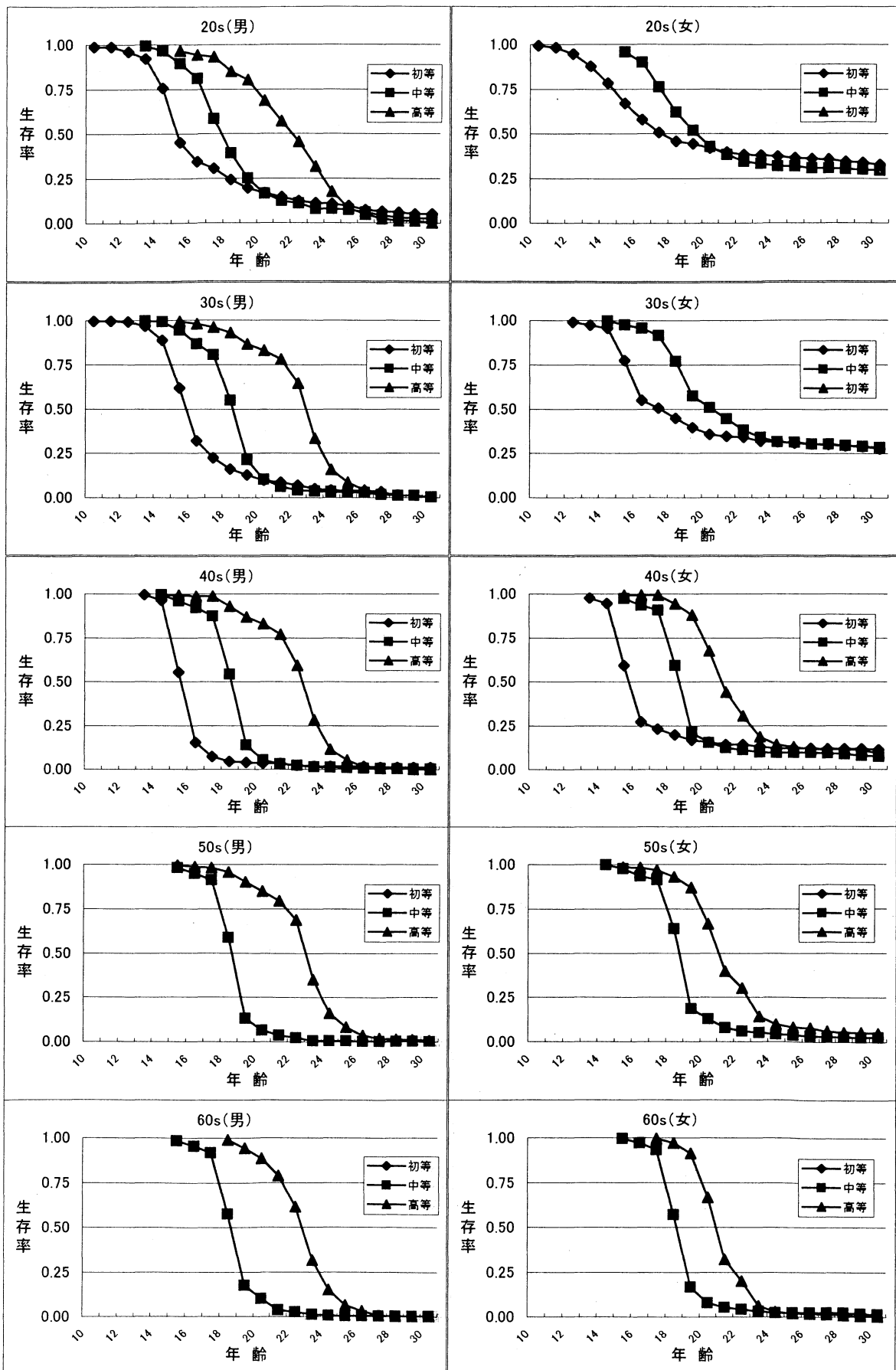


図4 学歴別、就職の生存率



タイミングが制度で定められたとおりには必ずしもいかない、つまり規範から逸脱した経験をする確率は、中等・初等教育に比べて高いといえる。このことは、とくに 20s 男性で顕著である。

同様のことが、卒業と近接して経験される就職の場合にもいえる。図 4 および表 3 に示したように、女性の 20s と 30s を別にするれば、生存曲線の学歴別プロフィールは、卒業年齢のそれと酷似している。

(b)学歴の先件変数

以上 2 つの出来事の傾向から、学歴が何によって決まることがわかれば、卒業と就職のタイミングの要因はおおかた明らかになるといえる⁽⁸⁾。そこで、学歴の規定要因を、タイミング分析のための、ほかの 3 つの説明変数との関連でみておきたい。それに先立ち、コーホート別の最終学歴を表 4 で確認しておく

表4 出生コーホート別最終学歴

								(単位:%)			
	コーホート	N (人)	初等	中等	高等		コーホート	N (人)	初等	中等	高等
男	20s	485	52.0	29.9	18.1	女	20s	562	60.7	34.9	4.4
	30s	645	38.9	38.9	22.2		30s	677	44.2	47.9	8.0
	40s	773	24.1	48.5	27.4		40s	857	24.0	59.2	16.8
	50s	683	7.5	48.6	43.9		50s	751	8.5	57.7	33.8
	60s	658	3.3	49.2	47.4		60s	736	2.7	53.8	43.5

と、明らかに 5 つのコーホート間での高学歴化傾向が示されている。

表 5 は出身階層別の学歴を表している。ここに明らかのように、すべてのコーホート

表5 学歴、出身階層別

								(単位:%)					
	コーホート	カテゴリー	N (人)	初等	中等	高等		コーホート	カテゴリー	N (人)	初等	中等	高等
男	20s	初等-農林漁	152	64.5	27.0	8.6	女	20s	初等-農林漁	180	81.1	17.8	1.1
		初等-自営	64	46.9	32.8	20.3			初等-自営	72	58.3	34.7	6.9
		初等-非自営	95	45.3	41.1	13.7			初等-非自営	107	47.7	48.6	3.7
		中等以上	70	7.1	31.4	61.4			中等以上	79	11.4	70.9	17.7
		計	381	+0.44 ^{a)}					計	438	+0.49		
	30s	初等-農林漁	195	53.3	34.9	11.8		30s	初等-農林漁	202	57.4	41.1	1.5
		初等-自営	79	38.0	43.0	19.0			初等-自営	66	34.8	60.6	4.5
		初等-非自営	106	28.3	51.9	19.8			初等-非自営	152	33.6	61.2	5.3
		中等以上	142	10.6	39.4	50.0			中等以上	122	12.3	57.4	30.3
		計	522	+0.41					計	542	+0.42		
	40s	初等-農林漁	170	35.9	58.8	5.3		40s	初等-農林漁	178	36.5	57.9	5.6
		初等-自営	69	21.7	47.8	30.4			初等-自営	72	23.6	65.3	11.1
		初等-非自営	192	25.0	51.0	24.0			初等-非自営	204	19.6	71.6	8.8
		中等以上	190	4.7	36.3	58.9			中等以上	243	6.2	54.7	39.1
		計	621	+0.42					計	697	+0.39		
	50s	初等-農林漁	- ^{b)}	-	-	-		50s	初等-農林漁	-	-	-	-
		初等-自営	145	11.7	63.4	24.8			初等-自営	149	15.4	60.4	24.2
		初等-非自営	200	6.0	60.0	34.0			初等-非自営	221	8.1	65.6	26.2
		中等以上	249	2.4	28.5	69.1			中等以上	263	1.5	46.4	52.1
		計	594	+0.37					計	633	+0.29		
60s	初等-農林漁	-	-	-	-	60s	初等-農林漁	-	-	-	-		
	初等-自営	52	5.8	59.6	34.6		初等-自営	63	4.8	61.9	33.3		
	初等-非自営	137	6.6	67.2	26.3		初等-非自営	157	3.2	66.2	30.6		
	中等以上	370	1.1	38.4	60.5		中等以上	409	0.5	45.5	54.0		
	計	559	+0.28				計	629	+0.21				

a) 数値はピアソン相関係数のrをあらわす。なお、尤度比χ²検定結果はすべてのコーホートにおいてp<.01.

b) 50s,60sの「初等-農林漁業」は「初等-自営」に含めてある。

において、本人の学歴は出身階層によってかなりはっきり分かれており、この傾向は年長のコーホートほど強い。ピアソンの相関係数 r は、男性では 20s から順に +0.44、+0.41、+0.42、+0.37、+0.28、女性は同じく +0.49、+0.42、+0.39、+0.29、+0.21 という各値からも、このことは確認される。コーホートが若くなるにつれて、関連が弱くなっているが、これは世代間で学歴の上昇移動が増したためであろう⁽⁹⁾。

きょうだい数および 15 歳以前の父死亡有無については、次に述べるような、わずかではあるが無視できないほどの関連が認められた。すなわち、きょうだい数については、男性は 20s をのぞく 4 つのコーホートに、女性は 20s と 30s をのぞく 3 つのコーホートに

表6 学歴、きょうだい数別

(単位: %)

	コーホート	カテゴリー	N (人)	初等 中等 高等			コーホート	カテゴリー	N (人)	初等 中等 高等			
男	20s	1人以下	46	47.8	30.4	21.7	女	20s	1人以下	63	54.0	41.3	4.8
		2人	42	57.1	19.0	23.8			2人	55	58.2	38.2	3.6
		3人以上	394	51.8	31.0	17.3			3人以上	441	61.7	33.8	4.5
		計	482	n.s., -0.03 ^{a)}					計	559	n.s., -0.04		
	30s	1人以下	55	49.1	29.1	21.8	30s	1人以下	54	40.7	44.4	14.8	
		2人	75	28.0	38.7	33.3		2人	74	40.5	45.9	13.5	
		3人以上	514	39.3	40.1	20.6		3人以上	547	44.8	48.6	6.6	
		計	644	*, -0.02				計	675	n.s., -0.07			
	40s	1人以下	144	11.8	50.7	37.5	40s	1人以下	139	18.0	59.7	22.3	
		2人	165	18.8	43.6	37.6		2人	185	18.4	58.4	23.2	
		3人以上	460	30.0	49.1	20.9		3人以上	533	27.6	59.3	13.1	
		計	769	**, -0.21				計	857	**, -0.13			
	50s	1人以下	269	3.3	39.0	57.6	50s	1人以下	256	3.5	50.4	46.1	
		2人	228	6.1	52.2	41.7		2人	245	4.9	62.0	33.1	
		3人以上	186	15.1	58.1	26.9		3人以上	249	17.3	60.6	22.1	
		計	683	**, -0.28				計	750	**, -0.26			
	60s	1人以下	392	3.1	45.2	51.8	60s	1人以下	416	2.9	47.4	49.8	
		2人	190	2.1	53.7	44.2		2人	220	1.4	60.0	38.6	
		3人以上	75	8.0	60.0	32.0		3人以上	99	5.1	67.7	27.3	
		計	657	**, -0.13				計	735	**, -0.15			

a) 左から順に、尤度比 χ^2 検定結果 (* $p < .05$, ** $p < .01$), ピアソンの相関係数の r をあらわす。

表7 学歴、15歳以前の父死亡有無別

(単位: %)

	コーホート	カテゴリー	N (人)	初等 中等 高等			コーホート	カテゴリー	N (人)	初等 中等 高等			
男	20s	なし	347	47.8	32.6	19.6	女	20s	なし	364	58.0	36.0	6.0
		あり	52	51.9	30.8	17.3			あり	54	48.1	51.9	-
		計	399	n.s., -0.03 ^{a)}					計	418	**, +0.02		
	30s	1)なし	482	34.9	40.7	24.5	30s	なし	511	39.9	51.1	9.0	
		2)あり	81	51.9	32.1	16.0		あり	100	51.0	43.0	6.0	
		計	563	*, -0.12				計	611	n.s., -0.08			
	40s	なし	627	22.0	48.6	29.3	40s	なし	707	22.5	59.1	18.4	
		あり	76	31.6	47.4	21.1		あり	73	27.4	60.3	12.3	
		計	703	n.s., -0.08				計	780	n.s., -0.05			
	50s	なし	633	6.6	48.2	45.2	50s	なし	692	8.2	55.8	36.0	
		あり	27	11.1	55.6	33.3		あり	33	6.1	81.8	12.1	
		計	660	n.s., -0.05				計	725	**, -0.08			
	60s	なし	619	3.2	48.9	47.8	60s	なし	697	2.7	53.1	44.2	
		あり	27	7.4	51.9	40.7		あり	23	-	60.9	39.1	
		計	646	n.s., -0.04				計	720	n.s., -0.01			

a) 左から順に、尤度比 χ^2 検定結果 (* $p < .05$, ** $p < .01$), ピアソンの相関係数の r をあらわす。

有意な関連が認められたが、その強さは男女ともに 30s 以降のコーホートにおいては微弱なものであった。方向としては、きょうだい数が多いほど学歴は低くなる (r は 30s から順に、男性で -0.21、-0.28、-0.13、女性で -0.13、-0.26、-0.15) (表 6 参照)。

一方、15 歳以前の父死亡有無については、男性の 30s、女性の 20s と 50s に有意な関連が認められたが、強さからいえば、父を早く亡くした人は学歴が低い傾向が 30s 男性に弱く存在する以外は、無視できるほどのものである。30s 男性では、15 歳以前に父親を亡くさなかったグループのうちで中等学歴以上に進んだのは 65 % 出会ったのに対して、15 歳以前に父親を亡くしたグループの場合は 48 % にとどまった (表 7 参照)。このコーホートが学校を卒業したのが 1950 年代であることは記憶にとどめておいてよいかもしれない。

(c) 卒業・就職タイミングの規定要因：学歴以外

上でみた 3 つの説明変数の学歴への規定力を踏まえた上で、出身階層、きょうだい数、父死亡の、卒業年齢と就職年齢との関連をみた。ただ、それぞれの変数の主たる効果は多変量解析を行わないと析出できないので、ここでは資料の提示は割愛する。

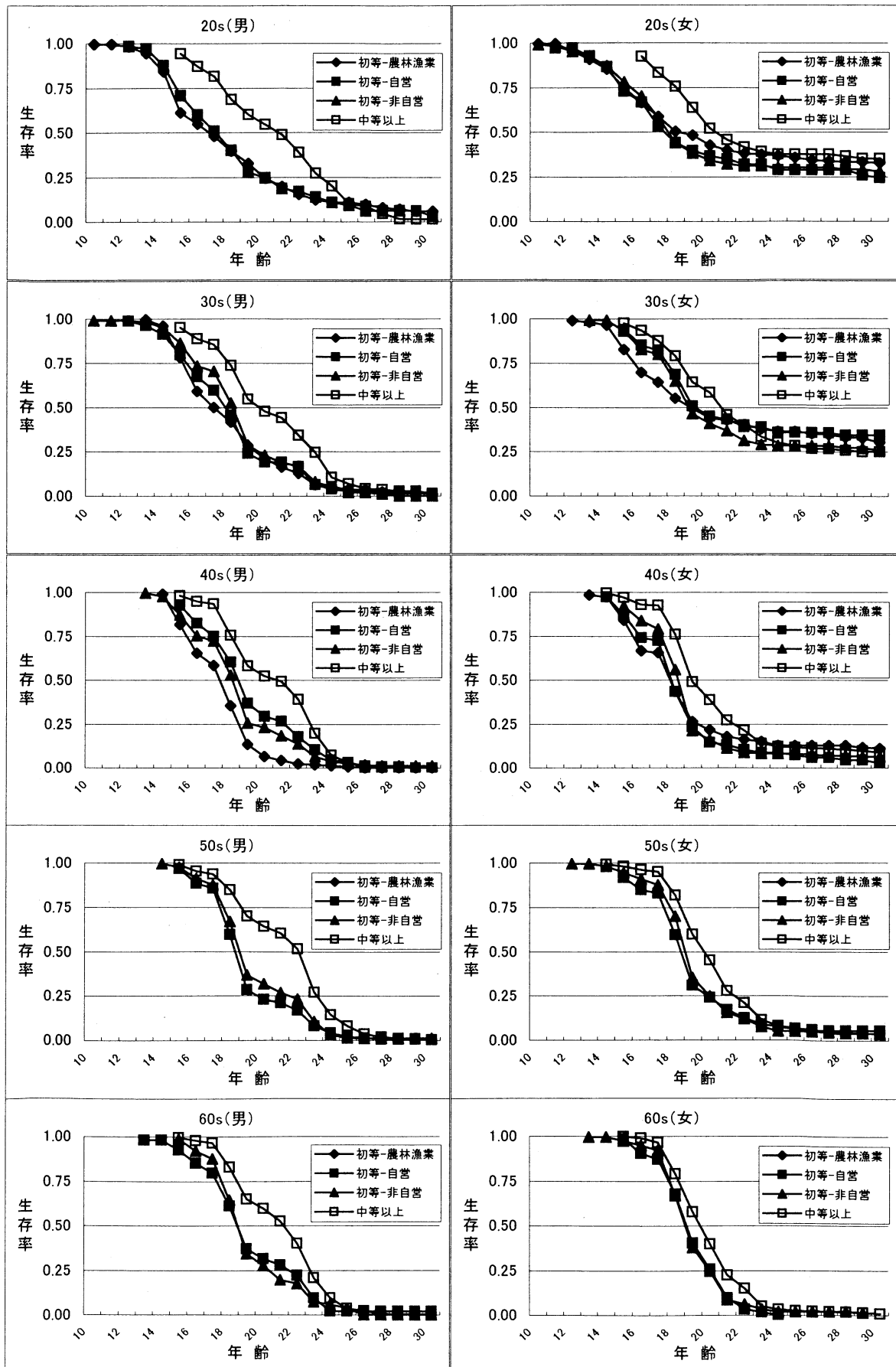
まず、卒業タイミングであるが、出身階層が低いほど、きょうだい数が多くなるほど、また、15 歳以前に父が死亡した場合はそうでない場合よりも、いずれも卒業タイミングは早くなるという傾向が認められた。つぎに、就職タイミングの場合も、卒業と同方向の関連が認められた (ただ、出身階層は女性の 20s・30s が、きょうだい数は男女とも 20s・30s が、父死亡はやはり男女とも 20s・40s・60s は有意ではなかった)。

こうした諸変数の卒業および就職タイミングとの関連傾向には、学歴の効果がかなり含まれていると考えてよい。また、卒業・就職ともにいえることは、3 つの変数とも、生存曲線を目視する限りでは男性に比べて女性は関連が弱いと見受けられた。

(d) 女性 20s・30s の就職普及度

ここまでの観察でたびたび例外あつかいを受けている 20s・30s 女性の就職について考察してみよう。少なくとも、40s 以降のコーホートと比べて、これら 2 つのコーホートでは、就職という出来事は全員に行き渡ってはいなかった。その生存曲線を 4 つの変数との関連で比較したところ、特徴がみられたのは出身階層だけであり、しかも、それほど顕著というわけではなかった。学歴、きょうだい数、父死亡有無では説明がつかなかった。図 5 にみるように、20s においては、とくに 20 歳代以降の曲線に注目すると、「中等教育以上」と「初等・農林漁業」の就業経験が「初等・自営」および「初等・非自営」に比べて低い。ところが、30s ではこの様相はかなり異なり、「中等教育」と「初等・自営」の関係が逆になっている。この理由については、ここではわからないが、ただ、少なくともいえることは、

図5 出身階層別、就職の生存率



「中等教育」階層出身の女性に対する労働力市場へのプッシュ要因と、反対に、「初等・自営」階層出身者のプル要因が 30s でより強く働いたという、コーホート間での変化が推察される⁽¹⁰⁾。

(e) 離家タイミングの規定要因

離家タイミングに関するクロス分析結果については、少し詳しく紹介しよう。まず、学歴別にみた離家タイミングであるが、概要を先にいえば、コーホートが若くなるほど、卒業年齢との近接度が増すという傾向が、男女ともにかがわれる。しかし、男女差もあるので、個別に述べよう（図 6 および表 8 参照）。

男性の離家は、どのコーホートにおいても、初等・中等は卒業・就職がらみで、一方、高等は進学がらみで離家したと推測させるに足る値を示している。このようなかたちの離家をした者が約半数はいたことがうかがわれる。また、曲線の傾きが 20s、30s、40s 以降と強くなっており、このことは上のような傾向がより強くなったことを表しているといえる。

20s においては、学歴にかかわらず、離家はかなり標準的な経験であった。ところが、30s 以降、中等教育以下は、離家を経験しない人の割合が 30～40% がある。とくに、30s では 40% と高い。

したがって、大まかにいえば、学歴が高いほど離家タイミングは遅くなるといえるが、

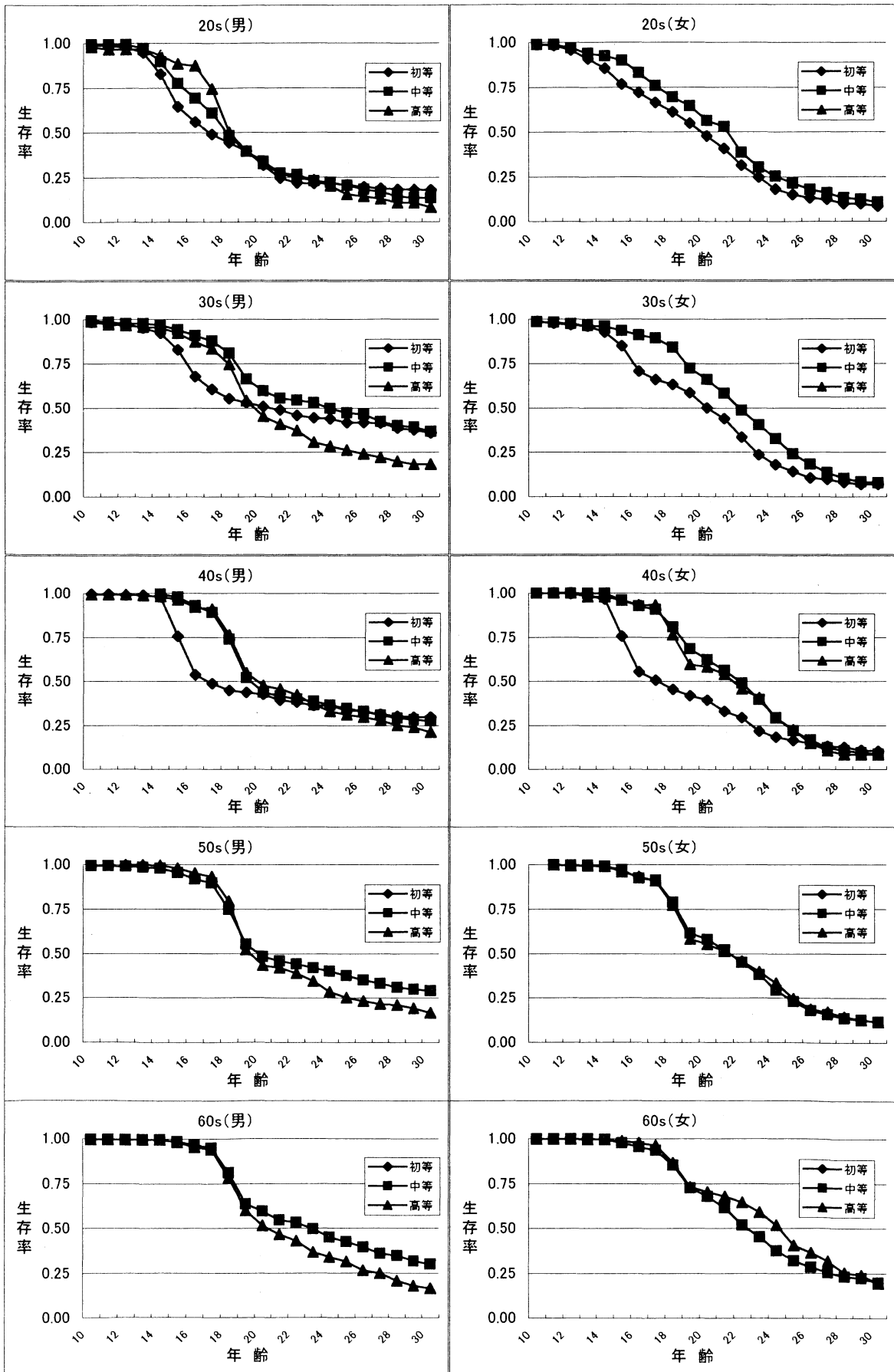
表 8 離家、学歴別

	コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile 50%ile 75%ile (Q1) (Med.) (Q3)			コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile 50%ile 75%ile (Q1) (Med.) (Q3)			
男	20s	初等	231	83.1	15.0	17.0	20.0	女	20s	初等	314	93.6	16.0	20.0	23.0
		中等	135	88.1	16.0	18.0	23.0			中等	206	90.8	18.0	22.0	25.0
		高等	87	92.0	17.0	19.0	22.0			高等 ^{b)}	-	-	-	-	-
		計	453	n.s., n.s., n.s. ^{a)}						計	520	***, n.s.			
	30s	初等	226	65.0	16.0	21.0	-	30s	初等	273	91.9	16.0	20.0	23.0	
		中等	245	65.7	19.0	24.0	-		中等	353	92.4	19.0	22.0	25.0	
		高等	138	87.0	18.0	20.0	26.0		高等	-	-	-	-	-	
		計	609	***, ***					計	626	***, ***, n.s.				
	40s	初等	179	72.6	16.0	17.0	-	40s	初等	195	91.3	16.0	18.0	23.0	
		中等	367	74.1	18.0	20.0	-		中等	493	92.9	19.0	22.0	25.0	
		高等	210	85.7	19.0	20.0	28.0		高等	144	92.4	19.0	22.0	25.0	
		計	756	***, *					計	832	***, ***, n.s.				
50s	初等	-	-	-	-	-	50s	初等	-	-	-	-	-		
	中等	327	72.8	18.0	20.0	-		中等	422	90.5	19.0	22.0	25.0		
	高等	299	88.3	19.0	20.0	25.0		高等	250	90.8	19.0	22.0	25.0		
	計	626	** , n.s., **					計	672	n.s., n.s., n.s.					
60s	初等	-	-	-	-	-	60s	初等	-	-	-	-	-		
	中等	321	71.0	19.0	23.0	-		中等	389	80.7	19.0	23.0	28.0		
	高等	312	83.7	19.0	21.0	27.0		高等	318	80.5	19.0	25.0	29.0		
	計	633	***, **					計	707	n.s., *, n.s.					

a) 左から順に、Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す (* $p < .05$, ** $p < .01$).

b) 20s, 30s 女性の高等は中等に含め、50s, 60s の初等は男女とも除外してある。

図6 学歴別、離家の生存率



しかしそれは卒業・就職がらみで離家する約半数の者にあてはまることであり、それ以外の理由で離家したと思われる残りの半数については、むしろ逆に、学歴が低い者のほうが親元にとどまりやすいということがいえる。

もう一つ、高等教育者のばらつきは小さいことも指摘できる。進学ないし卒業の絡んでいることが推察される。反対に、初等教育者のばらつきは 20s・30s は大きく、離家の事情がそれだけ多様であったと思われる。

一方、女性の場合、とりわけ年長の2つのコーホートにおいてプロフィールは男性とは異なっており、離家の事情の男女差を想起させるものとなっている。20s は学歴が高いほうが離家が遅い傾向があるけれども、プロフィールでは、卒業年齢と連動しているようにはみえず、なだらかなカーブを描いている。そして、離家が卒業年齢に集中するという先述の男性と同じパターンが現れるのは 30s の初等教育者からである。40s 以降では、初等および中等がほぼ卒業年齢で離家し、高等教育者は高卒後、進学年齢で離家するという、男性にみられた傾向が女性にもはっきりみられる。さらに、高等教育者の増加をみた 60s コーホートは、50s に比べて、高等教育者の離家タイミングが少し遅れるという新しい傾向も見える。以上の、男女にみられる離家タイミングの学歴差は、離家の事情を反映していると考えられる。このことは、次節の順序の分析で詳細に明らかにしたい。

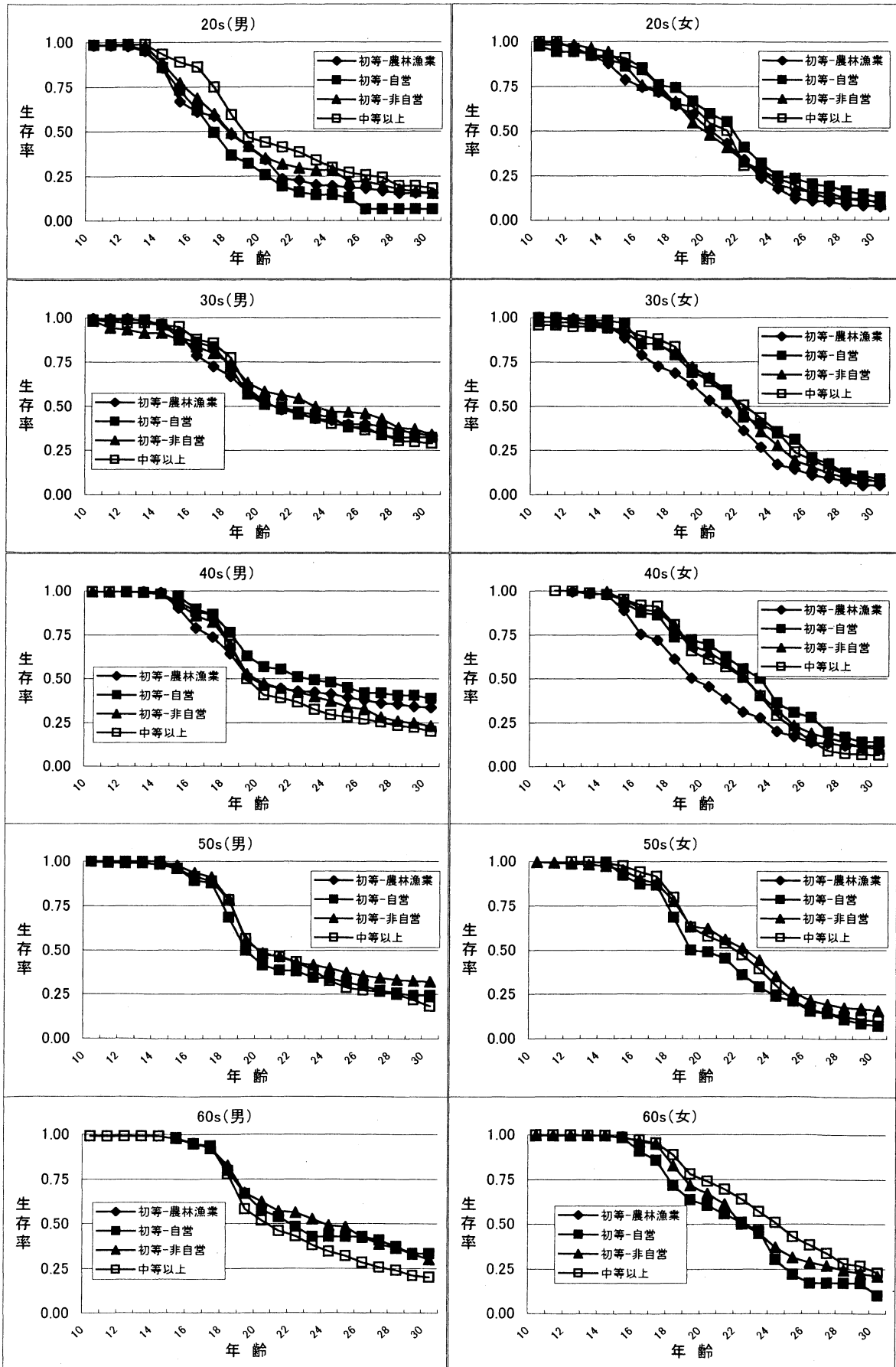
表9 離家、出身階層別

	コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)		コーホート	カテゴリー	N (人)	普及率 (Uncensored)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)
男	20s	初等-農林漁	156	85.3	15.0	18.0	21.0	女	20s	初等-農林漁	176	93.8	16.0	21.0	23.0
		初等-自営	64	93.8	15.0	17.0	21.0			初等-自営	69	89.9	18.0	22.0	24.0
		初等-非自営	92	88.0	16.0	18.0	25.0			初等-非自営	102	92.2	17.0	20.0	24.0
		中等以上	72	81.9	17.0	19.0	27.0			中等以上	75	93.3	18.0	21.0	24.0
		計	384	**n.s. ^{a)}			計			422	n.s.,n.s.,n.s.				
	30s	初等-農林漁	186	68.3	17.0	21.0	-	30s	初等-農林漁	189	93.7	17.0	21.0	24.0	
		初等-自営	71	69.0	18.0	21.0	-		初等-自営	62	90.3	19.0	22.0	26.0	
		初等-非自営	103	70.9	18.0	23.0	-		初等-非自営	145	92.4	19.0	22.0	25.0	
		中等以上	137	75.9	19.0	21.0	36.0		中等以上	117	90.6	19.0	23.0	25.0	
		計	497	n.s.,n.s.,n.s.			計		513	***n.s.					
	40s	初等-農林漁	173	68.2	17.0	20.0	-	40s	初等-農林漁	177	89.8	17.0	20.0	24.0	
		初等-自営	67	65.7	19.0	23.0	-		初等-自営	72	90.3	18.0	23.0	27.0	
		初等-非自営	190	80.0	18.0	20.0	29.0		初等-非自営	200	91.0	19.0	23.0	25.0	
		中等以上	195	84.1	18.0	19.0	28.0		中等以上	239	95.0	19.0	23.0	25.0	
		計	625	*n.s.,**			計		688	***n.s.					
	50s	初等-農林漁	- ^{b)}	-	-	-	-	50s	初等-農林漁	-	-	-	-	-	
		初等-自営	146	76.7	18.0	19.0	29.0		初等-自営	148	93.9	18.0	19.0	24.0	
		初等-非自営	199	72.4	19.0	20.0	-		初等-非自営	218	87.6	19.0	23.0	26.0	
		中等以上	249	85.9	19.0	20.0	28.0		中等以上	259	92.3	19.0	22.0	25.0	
		計	594	*n.s.,*			計		625	**n.s.					
	60s	初等-農林漁	-	-	-	-	-	60s	初等-農林漁	-	-	-	-	-	
		初等-自営	54	70.4	19.0	22.0	-		初等-自営	63	85.7	18.0	23.0	25.0	
		初等-非自営	137	70.8	19.0	24.0	36.0		初等-非自営	154	81.2	19.0	22.0	28.0	
		中等以上	372	79.8	19.0	21.0	28.0		中等以上	405	77.5	20.0	25.0	30.0	
計		563	**n.s.			計	622		***n.s.						

a) 左から順に、Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す(* $p < .05$, ** $p < .01$).

b) 50s, 60s の「1) 初等-農林漁業」は「2) 初等-自営」に含めてある。

図7 出身階層別、離家の生存率



出身階層による離家タイミングの違いは、図 7 および表 9 にみられるように、ほぼ学歴の場合と平行であり、父親の階層が高いほど離家が遅いと認められる。しかしながら、階層カテゴリー間の差異は、学歴の場合よりもかなり小さいものである。また、ここにはすでにみたように、学歴の効果が介在していると思われる。

きょうだい数による離家タイミングの違いはどうであろうか。図 8 および表 10 に示されているように、30s 以降では、きょうだいが多いほど離家が促進される。これが、すでにみたような、きょうだいが多いほど学歴が低いという学歴の効果が働いているかどうかは、多変量解析を行ってみたいとわからないが、少なくとも、きょうだいの多いかどうかは、直接・間接に離家のタイミングに影響するということはいえる。

15 歳以前の父死亡有無では、40s 男性において、父が 15 歳以前に死亡した場合、そうでない場合に比べて離家が促進される傾向が若干認められる以外は、どのコーホートも、15 歳以上の父死亡有無で離家のタイミングが異なることはなかった。

(3)小括

以上みてきた、成人期への移行出来事のタイミング分析から明らかになったことをまとめておこう⁽¹¹⁾。

卒業タイミングはコーホート間を通じて遅くなった。コーホート間で高学歴化が進んだため、卒業タイミングの遅れは高学歴化と強く結びついている。

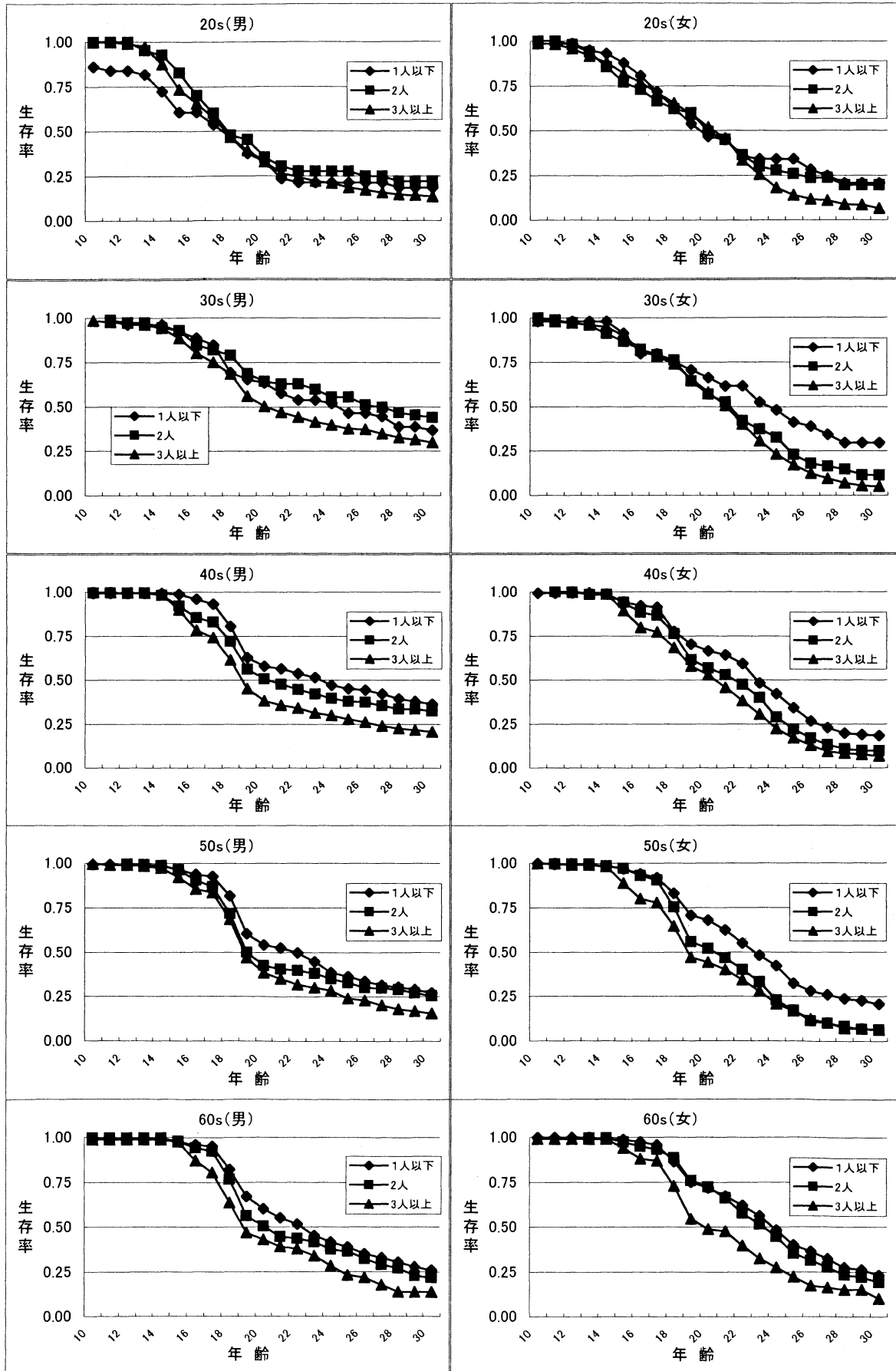
就職タイミングも卒業と近接しているため、やはり高学歴化と並行して遅くなった。

表 10 離家、きょうだい数別

	コ ー ホ ー ト	カ テ ゴ リ ー	N (人)	普 及 率 (Un- cen- sor- ed)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)		コ ー ホ ー ト	カ テ ゴ リ ー	N (人)	普 及 率 (Un- cen- sor- ed)	25%ile (Q1)	50%ile (Med.)	75%ile (Q3)
男	20s	1人以下	43	86.0	14.0	18.0	21.0	女	20s	1人以下	57	82.5	17.0	20.0	27.0
		2人	41	75.6	16.0	18.0	26.0			2人	49	77.6	16.0	20.0	26.0
		3人以上	392	87.2	15.0	18.0	22.0			3人以上	430	95.6	17.0	21.0	24.0
		計	476	n.s.,n.s.,n.s. ^{a)}						計	536	*.n.s.,*			
	30s	1人以下	52	63.5	18.0	25.0	-		30s	1人以下	49	67.3	19.0	24.0	35.0
		2人	71	57.7	19.0	27.0	-			2人	68	85.3	19.0	22.0	25.0
		3人以上	492	73.0	17.0	21.0	-			3人以上	523	95.2	18.0	22.0	24.0
		計	615	***						計	640	***.***			
	40s	1人以下	142	68.3	19.0	24.0	-		40s	1人以下	137	84.7	19.0	23.0	27.0
		2人	164	70.7	18.0	21.0	-			2人	179	92.2	19.0	22.0	25.0
		3人以上	464	82.3	17.0	19.0	27.0			3人以上	534	94.4	18.0	21.0	24.0
		計	770	***.***						計	850	***.***			
	50s	1人以下	270	75.9	19.0	22.0	36.0		50s	1人以下	252	84.5	19.0	23.0	28.0
		2人	229	79.9	18.0	19.0	31.0			2人	241	94.6	19.0	21.0	24.0
		3人以上	187	85.6	18.0	19.0	25.0			3人以上	248	93.5	18.0	19.0	24.0
		計	686	***.n.s.						計	741	***.***			
	60s	1人以下	397	74.6	19.0	23.0	33.0		60s	1人以下	416	77.9	19.0	24.0	30.0
		2人	191	79.1	19.0	21.0	29.0			2人	215	80.5	20.0	24.0	28.0
3人以上		77	87.0	18.0	19.0	25.0	3人以上	99		87.9	18.0	20.0	25.0		
計		665	***.n.s.				計	730		***.n.s.					

a) 左から順に、Log-Rank, Wilcoxon, 最尤法による各 χ^2 検定結果を表す(*p<.05,**p<.01).

図8 きょうだい数別、離家の生存率



学歴は出身階層、きょうだい数、父死亡のタイミングによってある程度規定されるので、そうした変数の効果が、学歴を介在して卒業や就職のタイミングに作用していることがうかがわれた。

女性では 20s と 30s の 2 コーホートにおいて、おそらく結婚前の就業が必ずしも一般的ではなかったが、その規定要因については同一ではないことがうかがわれた。

離家タイミングは、男性では 30s コーホートにおいて、親の死亡による離家経験なしが相対的に多かった。これには終戦後という歴史的状況の影響がうかがわれる。女性では 60s に大きな遅れが生じた。

離家は多かれ少なかれ卒業や就職と同期して起こることがうかがわれ、この傾向はコーホートが若くなるにつれて強くなった。しかし、その結びつきは、女性では男性よりも弱い。そして、卒業や就職とは別の理由で経験される離家については、中等教育以下では、高等教育者よりも親元にとどまる傾向があった。

以上の分析から、卒業、就職、そして離家といった複数の出来事相互の関連がどのようなものであるかを知ることが、個々の出来事のタイミングに劣らず重要であることがうかがいしれる。次節では、この出来事順序について詳しく論じよう。

4. 成人期への移行出来事の順序

本節では、成人期への移行を構成する卒業、就職、結婚、離家の 4 つの出来事の相互関係を、順序の観点から分析する。ホワイトが配列 (sequencing) という概念を整理するにあたって、出来事の生起そのものも一つの側面であることを指摘したが、これについては前節である程度あつかったので、ここでは 4 つの出来事すべてを経験したサンプルを対象としたい。なお、NFR98 調査では出来事の実験時点を年月で測定しているが、月が異なることの意味についての評価が単純ではないので、とりあえず本章の分析では、出来事の前後関係を経験年齢で比較している。

ところで、出来事の順序は、個々の出来事のタイミングによって結果的に決まる部分と、順序そのものについての社会規範なり当事者の戦略が作用している部分との両方があると考えられる。もし出来事相互の関係が前者に還元できるとすれば、順序は個人や家族にとって適応の結果だとみなすことができる。一方、順序規範や戦略を重視すれば、個々の出来事のタイミングのほうがむしろ適応の結果だとみなすことになる。いずれにせよ、両者の関係は複雑であって、どちらが規定要因であるかということは一概にいけない⁽¹²⁾。ただ、この分野の先行研究では、順序を分析するにあたって、社会規範の存在を前提としているので、本研究においても、出来事順序を記述する際に、順序規範にそくした分類を採用する⁽¹³⁾。

ただし、ここであつかう 4 つの出来事のうち、離家は必ずしもすべての人が経験するべ

きであるとの規範を前提とすることはできない。たとえば、農家のあととり息子が、一度も離家することなく結婚したとしても、それは逸脱でもなんでもなく、むしろ望ましいことでさえあるといえる。実際に、離家の普及度はほかの出来事よりも低い。そこで、以下では、まず離家をのぞいた3つの出来事、すなわち卒業、就職、結婚の順序を明らかにし、3つの出来事による成人期への移行過程の中で離家がどのように絡むかを問題にしていきたい。

(1) 卒業－就職－結婚の順序

卒業－就職－結婚の順序をとらえるに際して、日本ではほぼこの順序で経験することが一般的であるとみなせるだろう。すなわち、結婚にあたっては就職を完了していること、そして就職にあたっては卒業していることが望ましいという社会規範が強いと考えられ、先行研究の知見もこのことを強く示唆している (Hogan & Mochizuki, 1985)。そこで、あらかじめこれを標準的とみなす順序パターンを設定して観察することは妥当と考えられる。では、つづいて、実際に使用するパターン設定について述べよう。

上述のように、定位家族からの自立という観点からすると、結婚（生殖家族形成）をもって一応の自立ないし成人期への以降の完了とみなせるので、まず、卒業、就職、結婚のなかで、結婚が一番最後であるかどうかを区別し、これを1番目の軸とする。仮に、これを「結婚最終型」と「結婚非最終型」の2カテゴリーに分けておこう。ただしこの場合、卒業・就職のどちらかとの重複の有無は問わない。

つぎに、残る卒業と就職の前後関係であるが、卒業と中断なく就職する現在の傾向に照らすと、はたしてこれにあてはまらない移行はどのようにみられるかという問題を設定できる。そこで、卒業が就職に先行／両者が同年／就職が卒業に先行、の3カテゴリーが考えられる。とりあえず、これらを「卒業先行型」、「卒業就職型」、「就職先行型」と呼んでおく。これが2番目の軸である。

論理的には、これら2つの軸を組み合わせると6つのカテゴリーができるが、実際の分類に際しては、第1軸の結婚非最終型の下位分類には、卒業就職型の代わりに、結婚が3つの出来事のなかで最初に経験される「結婚先行型」を設定することにした。というのは、結婚非最終で、卒業と就職が同時というのは、結婚が3つの出来事のなかで最初に経験されるパターンに含まれ、また、この結婚が先頭に来る順序というのは、標準からの逸脱度をもっとも高いと考えられるからである。実際には、後述のように、最初の軸のカテゴリーである「結婚非最終型」はきわめて少数であり、また、そのなかのほとんどは卒業先行型であったので、第2軸での下位分類はほとんど意味をなさないかもしれないが、ここでは基礎的な資料としてそのまま提示する。

表 11 で、卒業・就職・結婚の順序パターンをコーホート別にみよう。まず、女性 20s、30s を別にすれば、男女ともに結婚最終型が大多数である。さらに、結婚最終型の中でも、1a 卒業先行と 1b 卒業就職とで大半を占めており、ここから、あらためて卒業→就職→結婚（どれかの重複も含めて）がきわめて一般的な順序で経験されていることが確認される。

ただし、結婚最終型の中で、卒業と就職の関係はコーホート間でかなり変化している。すなわち、卒業と同時に就職する 1b 型が、40s 以降は男女ともに一般化した。女性に比べて、男性では 30s からその兆候がみられ、緩やかな変化を示した。これは離家のタイミングの分析で指摘したことと並行しており、これについては次項でより詳細に明らかにされる。少なくともここでいえるのは、40s コーホートが卒業したのは、高度経済成長が始まった 1960 年代であり、すでに知られているように、新規卒業者を採用するという雇用慣行が定着していった時期にあたっていたことである。

男女の違いでもっとも目立つのは、20s、30s の女性には、結婚非最終型、しかも 1a 卒業先行が 3 割以上みられたことである。これは、実際には、卒業→結婚→（あるいは＝）就職という順序であり、結婚するまで働いたことがなかったというタイプである。おそらく、彼女たちは婚家の自営業に家族従業員として働いたか、もしくは専業主婦がパートなどの労働力化したかのいずれかと思われる。こうしたパターンの存在から、高度経済成長期以前は、成人期への移行経験がとくに女性にとって多様であったという事実が、前節のタイミング分析の知見とともにあらためて確認される。

さて、上述の順序パターンのコーホート内規定要因を探るべく、学歴をはじめとする 4 つの独立変数とのクロス分析を行ってみたが、目立った関連は認められなかった。その際、卒業就職同時のパターンが、高度経済成長期における新規学卒者の雇用労働力が大量創出にともなって一般化したという仮定に立って、より低い出身階層および学歴、多いきょうだい数との関連を予想したが、むしろ結果はどちらかという逆であった。おそらく、ここには変数間の交互作用が含まれていると推測されるが、その説明は今後の課題である。

表11 卒業、就職、結婚の順序パターン

(単位: %)

	結婚最終 ¹⁾			結婚非最終			N (人)
	1a 卒業 先行 ²⁾	1b 卒業 就職 ³⁾	1c 就職 先行	2a 卒業 先行	2b 就職 先行	2c 結婚 先行	
男 20s	34.7	49.9	8.9	5.4	0.8	0.2	481
30s	21.6	66.6	9.0	2.3	0.5	-	619
40s	11.5	80.9	6.9	0.3	0.3	0.1	771
50s	12.5	78.4	7.5	0.4	0.3	0.9	680
60s	12.2	81.9	5.3	-	0.5	0.2	663
女 20s	29.7	32.0	3.4	34.7	-	0.2	525
30s	28.9	38.2	2.3	30.1	0.6	-	655
40s	12.1	71.3	5.7	10.3	0.2	0.4	836
50s	10.8	75.8	7.5	4.8	0.4	0.7	724
60s	8.3	82.3	7.8	1.3	0.1	0.1	719

1)結婚未経験者もここに含めている。

2)「卒業先行」は卒業が就職に先行、「卒業就職」は2つ同時、「就職先行」は就職が卒業に先行、「結婚先行」は結婚が一番先頭、の各タイプをあらわす。

3)卒業・就職・結婚すべて同時(38ケース)は、ここに含む。

(2) 離家との同調性

離家は、上でみた卒業、就職、結婚の3つの出来事に比して、その理由に依存するところが多く、規範的なパターンは想定しにくい。さらに、NFR98 調査では離家の理由はたずねていないので、深い分析は望めない。とはいえ、先行研究が指摘しているような、近年の若者が結婚するまで親元にとどまる傾向が高まっている傾向を鑑みれば、このような制約のあるデータからも一定の知見は取り出せると考える。そこで、ここでは、離家がこれら3つの出来事と同時に経験される確率がどれくらいあるのかをみておきたい。なお、ここでは未婚者は除外して集計した。

(a) コーホート間比較

離家との同調性のカテゴリーは、論理的な組み合わせから、表 12 に示したように7通りある。男女間の違いについては少し後でふれるとして、まず男女に共通するコーホート間変化を指摘しておこう。それは、「e卒業・就職と同時」が40sが5つのコーホートの中では一番多いことである（もともと、女性では、さきの結婚による離家者が多い分だけ、男性よりも比率はかなり下がる）。とりわけ、男性40sでは4割がこのパターンを経験している。先ほどから何度か指摘しているように、このコーホートが高度経済成長期の労働市場の変化によって就職・卒業・離家の同調を多く経験したことがはっきりあらわれている。

表12 離家との同調性

(単位:%)

	a 非同時	b 卒業 と同時	c 就職 と同時	d 結婚 と同時	e 卒業 ・就職 と同時	f 卒業 ・結婚 と同時	g 就職 ・結婚 と同時	h 3つ すべて と同時	N (人)
男 20s	53.5	11.5	11.2	4.3	19.5	-	-	-	374
30s	44.6	4.2	9.7	14.9	26.7	-	-	-	404
40s	36.8	2.6	6.3	12.9	41.4	-	-	-	543
50s	48.2	2.3	5.2	17.0	27.0	-	0.2	-	477
60s	47.1	1.6	3.9	23.7	23.4	-	0.3	-	380
女 20s	26.6	4.9	10.6	42.7	11.2	0.3	3.7	-	349
30s	19.7	5.2	9.2	47.3	13.2	0.8	4.4	0.2	478
40s	19.6	2.4	5.6	47.6	23.0	0.7	0.8	0.3	710
50s	27.4	2.0	4.6	44.8	19.0	0.8	0.7	0.7	605
60s	24.6	1.0	5.1	56.4	10.7	0.2	0.8	1.2	488

さて、女性に顕著な特徴としては、5つのコーホートすべてにおいて、結婚と同時の離家が一番多いことである。女性の場合には、結婚までは親元にいるというパターンが半数近くを占めることがあらためて確認される。ところが、数は少ないものの、男性でも、このようなパターンはコーホート間で増加してきているのである。そして、男女それぞれにおいて、60sにおいてその比率は一段と上がっている。このことは、近年いわれる、結婚まで親元にとどまる傾向の増加をあらわしているのかもしれない。

ところで、男性で約半数、女性でも2割強は占める、どれとも「a非同時」パターンの

内訳については、今回の分析では明らかにできないが、ここには進学にともなう離家も含まれていると思われる。

(b)規定要因

離家との同調性を規定する要因はなんであろうか。やはり4つの独立変数との関連を個別に調べよう。なお、上述の7カテゴリーは煩瑣にすぎるので、ここではb・c・eの3つを「卒業ないし就職がらみの離家」、dとf～hを「結婚がらみの離家」、残るaをそのまま「非同期」、の3カテゴリーにまとめた。分析にあたって、男性では、卒業・就職がらみと非同期との対比が中心となろう。一方、女性では、卒業・就職がらみと結婚がらみの動向が焦点となろう。

まず、男性からみていこう。表13にみるように、離家との同調性パターンは、学歴によってかなりはっきりとした違いが存在する。すなわち、高等学歴者が卒業・就職がらみで離家することは少なく、ほとんどが非同期である。おそらく進学での離家が含まれているのだろう。反対に、初等・中等では、このパターンが一番多く、やはり40sでは中学卒業者の約7割がここに落ちる。全体的に、初等・中等と高等との間に大きな格差が存在しているといえる(入係数は、0.1を超えない20sをのぞき、30s以降順に、0.21、0.29、0.24、0.14)。

出身階層(表14)では、初等教育階層と中等以上階層との間にギャップがあり、前者は卒業・就職がらみが多い。ただ、30sと40s以外は、それほど大きいものではない(入係数は30s、40sはそれぞれ0.16と0.10、それ以外は0.05を上回らない)。その40sは

表13 離家同調性、学歴^{a)}別

(単位: %)

	コ-ホ-ト	カテゴリー	N (人)	卒業 結婚 非同 または 期 就職			コ-ホ-ト	カテゴリー	N (人)	卒業 結婚 非同 または 期 就職			
				卒業 または 就職	結婚	非同 期				卒業 または 就職	結婚	非同 期	
男	20s	初等	175	50.9	3.4	45.7	女	20s	初等	200	37.5	45.0	17.5
		中等	106	44.3	5.7	50.0			中等	138	10.9	47.8	41.3
		高等	74	17.6	2.7	79.7			高等	-	-	-	-
		計	355	0.06 ^{b)}					計	338	0.00		
	30s	初等	133	52.6	13.5	33.8	30s	初等	207	38.2	45.9	15.9	
		中等	151	47.7	18.5	33.8		中等	262	18.7	59.2	22.1	
		高等	114	17.5	11.4	71.1		高等	-	-	-	-	
		計	398	0.21				計	469	0.00			
	40s	初等	108	69.4	10.2	20.4	40s	初等	161	52.2	34.8	13.0	
		中等	257	61.1	14.8	24.1		中等	420	28.8	57.4	13.8	
		高等	168	20.8	12.5	66.7		高等	118	9.3	42.4	48.3	
		計	533	0.29				計	699	0.10			
50s	初等	-	-	-	-	50s	初等	-	-	-	-		
	中等	208	51.9	22.1	26.0		中等	350	32.6	52.6	14.9		
	高等	233	16.7	12.0	71.2		高等	202	6.9	40.1	53.0		
	計	441	0.24				計	552	0.09				
60s	初等	-	-	-	-	60s	初等	-	-	-	-		
	中等	177	42.9	28.8	28.2		中等	268	22.8	62.3	14.9		
	高等	183	14.2	19.1	66.7		高等	207	5.8	56.0	38.2		
	計	360	0.14				計	475	0.00				

a) 20s,30s女性の高等は中等に含め、50s,60sの初等は男女とも除外してある。

b) 数値は入係数をあらわす。なお、尤度比 χ^2 検定結果はすべてのコ-ホ-トにおいて $p<.01$ 。

やはり特徴的で、農家出身者の約3分の2が卒業・就職がらみで離家している（20sのみ有意ではない）。

はっきりした傾向がみられるのは以上2つの変数である。残るきょうだい数については、きょうだい数が多いと卒業・就職がらみが多いが、関連は度数を見る限り弱いものである（表15参照）。おそらく学歴の間接効果があると推測される（40sと50sのみ有意）。また、15歳以前の父死亡有無では、卒業・就職がらみの離家は、15歳以前の父死亡経験者に多くみられるが、関連はきわめて弱い（表省略）。

女性では、学歴との関連では、男性と同様、すべてのコーホートを通じて、卒業・就職がらみの離家は学歴が低いほど多いという傾向がある。とりわけ、やはり40sが特徴的で、中卒者の半数がこのパターンである。一方で、中等教育（新制高校）は、常に結婚離家が一般的だといえる。おそらく、高卒後、自宅から通勤し、結婚とともに離家したと思われる。これに対して、高等教育者は、60sで初めて結婚離家が非同期を上回る。また、この階層では卒業・就職がらみの離家はきわめて希である（λ係数は40sが0.01、50sが0.09）（表13参照）。

出身階層では、やはり40sは、農家の娘の約半数が卒業・就職がらみで離家しており、新卒雇用労働力の主たる供給源になったことがわかる。このコーホートでは、結婚で離家するのは、農家以外の階層に特化しているといつてよい。50s以降ではこのような分

表14 離家同調性、出身階層^{a)}別

(単位: %)

	コーホート	カテゴリー	N (人)	卒業 または 就職	結婚	非同期		コーホート	カテゴリー	N (人)	卒業 または 就職	結婚	非同期
男	20s	初等-農林漁	118	44.1	2.5	53.4	女	20s	初等-農林漁	115	29.6	50.4	20.0
		初等-自営	56	35.7	8.9	55.4			初等-自営	47	19.1	48.9	31.9
		初等-非自営	74	45.9	5.4	48.6			初等-非自営	68	25.0	48.5	26.5
		中等以上	52	25.0	5.8	69.2			中等以上	47	6.4	44.7	48.9
		計	300	n.s., 0.00 ^{b)}					計	277	**0.01		
	30s	初等-農林漁	120	53.3	14.2	32.5		30s	初等-農林漁	149	32.2	49.0	18.8
		初等-自営	48	47.9	14.6	37.5			初等-自営	48	27.1	62.5	10.4
		初等-非自営	69	30.4	18.8	50.7			初等-非自営	104	19.2	57.7	23.1
		中等以上	96	28.1	15.6	56.3			中等以上	84	19.0	57.1	23.8
		計	333	**0.16					計	385	n.s., 0.00		
	40s	初等-農林漁	108	64.8	12.0	23.1		40s	初等-農林漁	145	44.8	37.9	17.2
		初等-自営	39	48.7	12.8	38.5			初等-自営	58	22.4	63.8	13.8
		初等-非自営	141	48.2	20.6	31.2			初等-非自営	167	28.1	59.3	12.6
		中等以上	157	38.2	9.6	52.2			中等以上	211	19.4	52.1	28.4
		計	445	**0.10					計	581	**0.04		
	50s	初等-農林漁	-	-	-	-		50s	初等-農林漁	-	-	-	-
		初等-自営	97	46.4	13.4	40.2			初等-自営	123	35.8	48.8	15.4
		初等-非自営	124	39.5	16.1	44.4			初等-非自営	173	24.3	50.9	24.9
		中等以上	188	25.5	18.6	55.9			中等以上	217	13.8	49.3	36.9
		計	409	**0.03					計	513	**0.00		
60s	初等-農林漁	-	-	-	-	60s	初等-農林漁	-	-	-	-		
	初等-自営	31	35.5	22.6	41.9		初等-自営	46	21.7	52.2	26.1		
	初等-非自営	74	35.1	35.1	29.7		初等-非自営	108	20.4	55.6	24.1		
	中等以上	212	24.1	17.9	58.0		中等以上	264	13.3	62.9	23.9		
	計	317	**0.03				計	418	n.s., 0.00				

a) 50s, 60sの「初等-農林漁業」は「初等-自営」に含めてある。

b) 左から順に、尤度比χ²検定結果(*p<.05, **p<.01), λ係数をあらわす。

化はみられず、むしろ全体的に結婚離家が一般化した。一方、非同期は中等以上階層に目立ち、進学がらみの離家が推測される。60s では、中等以上階層の結婚離家が6割で一番多く、サラリーマンの娘が結婚まで親元にいることが一般化したといえる。これは無視できない階層格差であるといえる（表 14 参照、なお 30s と 60s は有意ではない）。

きょうだい数が多くなると、結婚まで親元にとどまりやすい傾向がみられる。40s 以降においてはつきりする（有意）。とくに 60s では、きょうだい2人以下では約6割が結婚で離家するが、3人以上では4割に満たない。ただ関連は弱く、λ係数が0.1を超えない（表 15 参照）。

15歳以前の父死亡有無については、女性の場合も関連は見いだせなかった。

以上、卒業・就職・結婚と離家との同調性パターンの分析からわかることをまとめると、高度経済成長期に卒業・就職した 40s コーホートの農家出身の中学卒業者たちの間で、卒業・就職がらみの離家が一般的にみられた。一方、父が中等教育以上の階層で、本人が高等教育学歴をもつ者の間では、卒業・就職がらみの離家はまれであって、非同期が一般的であった。女性の結婚離家は中等教育（高卒）者の特徴であったが、60s において高等教育者にも普及したといえる。

では、ここまで別々にみてきた、卒業・就職・結婚の順序パターンと離家との同調性との間にはどのような結びつきがあるだろうか。この問題を次にあつかう。

(3) 出来事順序と離家との同調性との関連

順序についての最後の分析として、卒業・就職・結婚の3つの順序と、離家との同調性

表15 離家同調性、きょうだい数別

(単位:%)

	コーホート	カテゴリー	N (人)	卒業 または 就職			非同期		コーホート	カテゴリー	N (人)	卒業 または 就職			非同期
				卒業	結婚	非同期						卒業	結婚	非同期	
男	20s	1人以下	32	31.3	3.1	65.6	n.s.,0.00 ^{a)}	女	20s	1人以下	29	41.4	24.1	34.5	
		2人	30	33.3	3.3	63.3				2人	34	35.3	44.1	20.6	
		3人以上	311	44.1	4.5	51.4				3人以上	284	23.9	49.3	26.8	
		計	373							計	347	n.s.,0.03			
	30s	1人以下	30	36.7	16.7	46.7	n.s.,0.00	30s	1人以下	19	26.3	47.4	26.3		
		2人	39	35.9	23.1	41.0			2人	49	28.6	55.1	16.3		
		3人以上	334	41.3	13.8	44.9			3人以上	409	27.6	52.6	19.8		
		計	403						計	477	n.s.,0.00				
	40s	1人以下	90	42.2	15.6	42.2	*0.02	40s	1人以下	100	18.0	56.0	26.0		
		2人	104	41.3	11.5	47.1			2人	152	28.3	52.6	19.1		
		3人以上	348	54.9	12.6	32.5			3人以上	458	34.7	46.9	18.3		
		計	542						計	710	*0.00				
	50s	1人以下	179	27.4	19.6	53.1	*0.04	50s	1人以下	189	11.1	56.1	32.8		
		2人	161	32.9	16.8	50.3			2人	202	26.7	47.5	25.7		
		3人以上	137	46.0	14.6	39.4			3人以上	213	37.6	38.0	24.4		
		計	477						計	604	**0.00				
	60s	1人以下	218	27.5	25.2	47.2	n.s.,0.00	60s	1人以下	265	11.3	63.8	24.9		
		2人	115	26.1	24.3	49.6			2人	147	15.6	59.9	24.5		
3人以上		47	42.6	17.0	40.4	3人以上			75	38.7	37.3	24.0			
計		380				計			487	**0.00					

a) 左から順に、尤度比 χ^2 検定結果(* $p < .05$, ** $p < .01$), λ 係数をあらわす。

との関連をみることによって、成人期への移行出来事の順序について、総合的な知見を析出しておきたい。集計分析に際して、前の2つの分析にそれぞれ用いたカテゴリー設定をそのままかけあわせるのは煩瑣になりすぎるので、これまでの分析知見を踏まえてサンプル数が極端に少ないカテゴリーは整理・統合した。具体的には、卒業、就職、結婚の順序については、次の要領で、もとの6カテゴリーから3カテゴリーに統合した。すなわち、結婚非最終型の下位分類は統合し、結婚最終型の下位分類についても、卒業就職型とそれ以外の2分類にまとめた。離家との同調性については、さきのクロス分析で用いた3カテゴリーを使用した。これら2つの変数をかけあわせて、9カテゴリーからなる変数を作成した。

(a) コーホート間変化

表16には、上で観察した移行順序における2つの側面の特徴が集約されている。まず男性では、20s・30sでは、卒業・就職・結婚・離家の順序が多様であった。すなわち、結婚非最終型を別にすれば、残る6つのカテゴリーのどれかに極端に特化するという事はなかった。ところが、40sにおいて、結婚最終・卒業就職同時が大多数を占め、同時に、そのうちで、卒業・就職がらみの離家が4割と一番多くなった。わかりやすくいえば、卒業＝就職＝離家→結婚というかたちである。そして、このコーホートにおいて、卒業と同時に就職することが一般的になったといえよう。この形を維持しつつ、しかしながら、50s・60sでは、卒業・就職がらみの離家は「103 非同時」に首位の座を明け渡した。と同時に、結婚まで親元にとどまるパターンが男性の間にも増えてきた。

女性では、男性とは少し違った意味で、20s・30sがほかのコーホートと異なっている。すなわち、結婚で離家し、その後就職した201型が少しではあるが、いたことである。しかし、40s以降、結婚前に就職し、卒業と同時に就職するパターンが男性と同様に一般化した。もっとも、女性の場合、結婚で離家するパターンが常に一番多かった。ただ、40sでは、その傾向に変化は加えなかったけれども、卒業・就職がらみでの離家が4分の1出現した。

表16 成人期への移行出来事の順序パターン

(単位: %)

卒・就・ 婚順序	結婚最終						結婚非最終			N (人)	
	卒業就職同時			卒業就職非同時			201 結婚時	202 卒業/就 職時	203 非同時		
	101 結婚時	102 卒業/就 職時	103 非同時	111 結婚時	112 卒業/就 職時	113 非同時					
男	20s	2.7	19.5	28.1	1.3	21.1	21.4	0.3	1.6	4.0	374
	30s	10.1	26.7	30.4	4.2	12.9	13.6	0.5	1.0	0.5	404
	40s	11.2	41.4	30.6	1.7	8.3	6.1	-	0.6	0.2	543
	50s	14.9	27.0	36.3	2.1	7.5	10.1	0.2	-	1.9	477
	60s	20.5	23.4	38.9	2.9	5.5	7.6	0.5	-	0.5	380
女	20s	15.8	11.2	11.2	17.5	13.5	10.3	13.5	2.0	5.2	349
	30s	19.5	13.2	9.4	16.9	11.9	4.6	16.3	2.5	5.6	478
	40s	39.2	23.0	13.1	6.2	6.8	4.1	4.1	1.3	2.4	710
	50s	37.7	19.0	20.8	6.6	6.1	5.8	2.6	0.5	0.8	605
	60s	52.5	10.7	19.7	5.7	6.1	4.5	0.4	-	0.4	488

(b)規定要因

最後の分析として、上でみた、卒業・就職・結婚・離家の順序パターンの要因を検討してみよう。その際、説明変数別に述べるのではなく、これまでの観察結果をふまえて、20s・30s と 40s と 50s・60s という3つのグルーピングをして、独立変数間の関係にも注意を払いつつ考察を進めよう。ただ、40s以降のコーホートでは、卒業就職同時の結婚最終以外は数が少ないので、さきの離家との同調性の分析と述べるべき結果はかなり重複するので、手短かにまとめるにとどめたい（男性は表 17、女性は表 18 を参照）。なお、きょうだい数と 15 歳以前の父死亡有無については、はっきりした関連がみられなかったので、考察は差し控えたい。

男性の 20s・30s コーホートでは、どちらも、102 型と 103 型の間に学歴との関連があり、学歴が高いほど 103 型が多い。また、20s でそれぞれ 2 割ほどある、卒業が就職と同時になかった 112 型、113 型では、112 型の高等教育を別として、学歴差が見いだせない。これは 102 型と 103 型との間で差があるのとは異なる傾向を示している。階層についても、20s では、中等教育階層とそれより下の階層との間で格差があり、前者の半数が卒業＝就職→結婚でかつ離家が非同期の 103 型である。初等教育階層では、102 型と 103 型が併存している。30s では、初等自営業階層で 102 型（卒業＝就職＝離家→結婚）が優位であるのに対し、非自営業層（中等含む）では 103 型（非同時）が優位である。

すでに明らかなように、20s と 30s に共通するのは、卒業と就職が同時ではなかった型（そのほとんどは就職先行だが）がほかのコーホートよりも多くみられた。卒業と就職の間に間隔があいてしまうのは、ある意味逸脱である。そして、離家との同調性を絡めると、さらに卒業就職非同時に属する 113 型、すなわち、離家が卒業・就職・結婚のどれとも同調しないタイプにおける階層差が 103 型に比べて小さく、どの階層でも一定数はあるということである。とりわけ 20s についてそれが目に付く。ここから、戦中、戦後に成人を迎えたこれらのコーホートのうち、歴史的状況によってスムーズな移行を妨げられた人たちの存在が想像される。

40s は、中卒者の 6 割が、卒業＝就職＝離家→結婚の 102 型をとる。高卒者も、5 割がこのパターンで、102 型と 112 型を足すとやはり 6 割が卒業≠就職（＝離家）→結婚となる。階層においても、農家出身者の 6 割が 102 型であって、農家以外の出身者のおよそ 2 倍となっている。繰り返し述べているように、農家出身の中卒者が特徴的な移行行動をしたコーホートである。

50s・60s のコーホートで増えてきた、結婚で離家する 101 型は、中等が高等よりも多い。階層でいうと、初等・非自営業層である。中等以上階層出身者の本人学歴は高等が多いので、結婚離家は一般的ではない。

一方、女性では、まず 20s・30s は、男性と同じく、102 型と 103 型の間に関連があり、

表17 成人期への移行出来事の順序パターンの規定要因^{a)}-男性

(単位: %)

コ ホ ト	独立 変数	カテゴリー	N (人)	結婚最終						結婚非最終		
				卒業就職同時			卒業就職非同時			201 結婚時	202 卒業/ 就職時	203 非同時
				101 結婚時	102 卒業/ 就職時	103 非同時	111 結婚時	112 卒業/ 就職時	113 非同時			
20s	学歴	初等	175	2.9	26.3	19.4	0.6	22.9	23.4	-	1.7	2.9
		中等	106	1.9	16.0	31.1	2.8	26.4	17.0	0.9	1.9	1.9
		高等	74	2.7	5.4	48.6	-	12.2	23.0	-	-	8.1
		計	355	**0.05 ^{b)}								
	出身 階層	初等-農林漁	118	1.7	22.9	21.2	0.8	19.5	28.0	-	1.7	4.2
		初等-自営	56	5.4	10.7	28.6	3.6	23.2	21.4	-	1.8	5.4
初等-非自営		74	2.7	24.3	25.7	1.4	20.3	18.9	1.4	1.4	4.1	
中等以上		52	5.8	7.7	48.1	-	15.4	17.3	-	1.9	3.8	
計	300	n.s.,0.04										
30s	学歴	初等	133	6.8	30.8	20.3	6.0	20.3	13.5	0.8	1.5	-
		中等	151	13.2	33.1	23.2	4.6	13.2	10.6	0.7	1.3	-
		高等	114	9.6	13.2	52.6	1.8	4.4	16.7	-	-	1.8
		計	398	**0.11								
	出身 階層	初等-農林漁	120	7.5	32.5	21.7	6.7	19.2	10.0	-	1.7	0.8
		初等-自営	48	8.3	37.5	22.9	4.2	10.4	14.6	2.1	-	-
初等-非自営		69	14.5	20.3	36.2	4.3	8.7	14.5	-	1.4	-	
中等以上		96	15.6	21.9	39.6	-	6.3	15.6	-	-	1.0	
計	333	*0.09										
40s	学歴	初等	108	8.3	60.2	17.6	1.9	8.3	2.8	-	0.9	-
		中等	257	12.8	50.6	19.1	1.9	10.1	5.1	-	0.4	-
		高等	168	11.3	14.9	56.5	1.2	5.4	9.5	-	0.6	0.6
		計	533	**0.22								
	出身 階層	初等-農林漁	108	10.2	57.4	18.5	1.9	7.4	4.6	-	-	-
		初等-自営	39	12.8	35.9	33.3	-	10.3	2.6	-	2.6	2.6
初等-非自営		141	17.7	37.6	24.8	2.8	9.2	6.4	-	1.4	-	
中等以上		157	7.6	30.6	45.2	1.9	7.6	7.0	-	-	-	
計	445	**0.09										
50s	学歴	初等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		中等	208	18.8	43.3	19.7	3.4	8.7	5.8	-	-	0.5
		高等	233	10.3	10.7	53.2	1.3	6.0	14.6	0.4	-	3.4
		計	441	**0.18								
	出身 階層	初等-農林漁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		初等-自営	97	11.3	37.1	33.0	2.1	9.3	6.2	-	-	1.0
初等-非自営		124	13.7	29.8	34.7	1.6	9.7	9.7	0.8	-	-	
中等以上		188	16.0	20.7	43.6	2.7	4.8	8.5	-	-	3.7	
計	409	*0.02										
60s	学歴	初等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		中等	177	24.9	36.2	22.6	4.0	6.8	5.1	-	-	0.6
		高等	183	15.8	10.9	56.8	2.2	3.3	9.3	1.1	-	0.5
		計	360	**0.11								
	出身 階層	初等-農林漁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		初等-自営	31	22.6	32.3	35.5	-	3.2	6.5	-	-	-
初等-非自営		74	32.4	27.0	24.3	1.4	8.1	5.4	1.4	-	-	
中等以上		212	14.6	18.9	50.0	2.8	5.2	7.5	0.5	-	0.5	
計	317	*0.03										

a) 学歴については、20s,30s女性の高等は中等に含め、50s,60sの初等は男女とも除外してある。出身階層については、50s,60sの「初等-農林漁業」は「初等-自営」に含めてある。

b) 左から順に、尤度比 χ^2 検定結果(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$), λ 係数をあらわす。

表18 成人期への移行出来事の順序パターンの規定要因^{a)}-女性

(単位: %)

コーホート	独立変数	カテゴリー	N (人)	結婚最終						結婚非最終		
				卒業就職同時			卒業就職非同時			201	202	203
				101 結婚時	102 卒業/ 就職時	103 非同時	111 結婚時	112 卒業/ 就職時	113 非同時			
20s	学歴	初等	200	13.5	17.0	8.0	18.0	17.5	7.0	13.5	3.0	2.5
		中等	138	18.1	2.9	16.7	16.7	8.0	15.9	13.0	-	8.7
		高等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		計	338	**0.05 ^{b)}								
	出身階層	初等-農林漁	115	16.5	10.4	6.1	19.1	17.4	10.4	14.8	1.7	3.5
		初等-自営	47	17.0	12.8	12.8	14.9	4.3	17.0	17.0	2.1	2.1
初等-非自営		68	16.2	8.8	10.3	22.1	16.2	11.8	10.3	-	4.4	
中等以上		47	8.5	-	25.5	19.1	4.3	10.6	17.0	2.1	12.8	
	計	277	*0.04									
30s	学歴	初等	207	15.9	16.4	6.3	14.0	19.3	3.9	15.9	2.4	5.8
		中等	262	22.9	10.3	11.5	19.8	6.1	5.0	16.4	2.3	5.7
		高等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		計	469	**0.11								
	出身階層	初等-農林漁	149	12.1	17.4	8.1	15.4	12.8	4.0	21.5	2.0	6.7
		初等-自営	48	16.7	10.4	2.1	27.1	8.3	2.1	18.8	8.3	6.3
初等-非自営		104	27.9	10.6	8.7	21.2	6.7	5.8	8.7	1.9	8.7	
中等以上		84	23.8	8.3	14.3	16.7	8.3	7.1	16.7	2.4	2.4	
	計	385	*0.09									
40s	学歴	初等	161	26.1	42.9	6.2	5.6	6.8	3.7	3.1	2.5	3.1
		中等	420	46.9	21.9	9.0	6.4	6.0	3.1	4.0	1.0	1.7
		高等	118	31.4	1.7	36.4	5.1	6.8	8.5	5.9	0.8	3.4
		計	699	**0.22								
	出身階層	初等-農林漁	145	27.6	34.5	9.7	6.9	7.6	4.1	3.4	2.8	3.4
		初等-自営	58	46.6	19.0	12.1	12.1	3.4	1.7	5.2	-	-
初等-非自営		167	49.7	21.6	10.8	6.0	6.0	1.2	3.6	0.6	0.6	
中等以上		211	42.2	13.3	17.5	5.7	5.2	7.6	4.3	0.9	3.3	
	計	581	**0.09									
50s	学歴	初等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		中等	350	43.1	26.3	11.4	7.7	6.0	2.9	1.7	0.3	0.6
		高等	202	31.2	2.5	39.1	5.0	4.0	12.4	4.0	0.5	1.5
		計	552	**0.18								
	出身階層	初等-農林漁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		初等-自営	123	35.0	28.5	12.2	10.6	6.5	2.4	3.3	0.8	0.8
初等-非自営		173	42.8	18.5	18.5	6.4	5.8	4.6	1.7	-	1.7	
中等以上		217	39.6	9.2	27.6	6.0	4.1	9.2	3.7	0.5	-	
	計	513	**0.02									
60s	学歴	初等	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		中等	268	55.2	14.6	11.6	6.3	8.2	3.0	0.7	-	0.4
		高等	207	51.2	2.9	30.9	4.8	2.9	6.8	-	-	0.5
		計	475	**0.11								
	出身階層	初等-農林漁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		初等-自営	46	45.7	6.5	23.9	6.5	15.2	2.2	-	-	-
初等-非自営		108	52.8	13.0	19.4	2.8	7.4	4.6	-	-	-	
中等以上		264	56.1	9.5	18.6	6.4	3.8	4.5	0.4	-	0.8	
	計	418	n.s.,0.03									

a) 学歴については、20s,30s女性の高等は中等に含め、50s,60sの初等は男女とも除外してある。出身階層については、50s,60sの「初等-農林漁業」は「初等-自営」に含めてある。

b) 左から順に、尤度比 χ^2 検定結果(* $p<0.05$,** $p<0.01$), λ 係数をあらわす。

学歴が高いほど 103 型が多い。しかし、関連は男性よりも弱い（入係数は 20s では、男性 0.05 に対して、女性は 0.01、30s では男性 0.11、女性 0.02）。階層では、男性と同様の傾向も認められる。しかし、むしろ目立つのは、30s において、非自営層の 4 分の 1 が卒業＝就職→結婚＝離家の 101 型である。このパターンの学歴差は階層差よりも小さい。この 101 型はこれより後のコーホートで一般的になるが、その意味でいうと、30s の非自営層出身者たちが、101 型の走りとなったという見方ができるかもしれない。ただ、結局、20s・30s で、卒業後、就職することなく結婚まで親元にとどまる 201 型が、どのような社会層に顕著であるかを今回の分析では解明することはできなかった。

40s 女性の、中学卒の 4 割が卒業＝就職→結婚＝離家の 102 型で、これが一番多い。高校卒の約半数は、卒業＝就職→結婚＝離家の 101 型である。短大以上は、2 つのパターンが 3 割ずつである。階層では、農家以外の出身の約半数は、卒業＝就職→結婚＝離家の 101 型で、これが一番多い。一方、農家出身者の 3 分の 1 が卒業＝就職＝離家→結婚の 102 型となる。

50s・60s では、卒業＝就職→結婚＝離家の 101 型には学歴差はほとんどなく、50s から 60s へと増加した。しかし、高学歴者に卒業＝就職＝離家→結婚の 102 型はほとんどない。階層では、101 型の階層差はほとんどない。50s では、卒業＝就職＝離家は自営層に、卒業＝就職→結婚（離家は非同期）は中等教育階層に特徴的であったが、60s では、中等教育階層も大部分 101 型にシフトしたために、階層差がなくなった。

(4)小括

男性では、卒業と同時に就職するのは、戦後に卒業した 30s コーホートからみられたが、これが一般化したのは 40s 以降のコーホートであった。このコーホートでは高度経済成長期の労働市場の変化により、主として農家出身中学新規卒業者の卒業・就職にともなう離家が顕著であった。高度経済成長末期から低成長時代に卒業した 50s・60s では、卒業と同時の就職が標準化した。離家のタイミングはむしろ結婚もしくは、おそらくは進学と同期するようになった。

女性では、20s・30s コーホートの移行の様相は、若いコーホートよりも多様であり、結婚まで親元にとどまるパターンは少なかった。40s コーホートが、男性と同様に、農家出身中学新規卒業者において卒業・就職にともなう離家を多く経験したとともに、一方では、高卒以上の結婚離家パターンが一般化した。やはり男性と同様、卒業と同時の就職が標準化した。50s・60s では、結婚まで親元にとどまるのがコーホート全体で主たるパターンとなった。

以上のように、成人期への移行出来事の順序に対する影響要因として、学歴、学歴を決める出身階層といった社会構造的条件、そして、きょうだい数、すなわち家族の資源およ

びその中の配分を左右すると考えられる条件などが、影響の強弱に違いはあれ、確認することができた。なかでも、親の階層、それがもたらす学歴、さらには、それにもとづく労働市場への参入の状況といった、移行を形づくる要因の連鎖が大きく働いていることが示唆された。

5. 考察

本研究で明らかになった成人期への移行出来事の様相は、家族にとってはどのような意味をもつのだろうか。本節では、ここまでの分析で得られた知見を先行研究と照らし合わせた上で、本研究における成果について述べ、それを戦後の家族と個人のライフコースの変動のコンテクストに位置づけて若干の考察を行っておきたい。とりわけ、全国サンプルで成人期への移行出来事を調べたことが今回のデータの大きなアドバンテージであるから、その知見を評価するためにも先行研究との照らし合わせが不可欠である。

ここでは、森岡清美を代表とする FLC 研究会が 1980 年代初期に静岡で行ったライフコースと世代間関係についての調査研究（森岡・青井, 1987）、ならびに早稲田大学人間総合研究センターが 80 年代終わりに新宿区と福島市で行ったライフコース調査研究（正岡ほか, 1990&1991）の知見と照らし合わせてみよう⁽¹⁴⁾。

まず、タイミング分析で指摘した、20s 男性の中・高等教育者の卒業タイミングは制度的な修了年齢からの逸脱が大きいという事実から検討してみよう。FLC 調査における、本章の分析に関連する知見を抜き出すと、つぎのようなものである。第二次大戦期に成人を迎えた 1920 年代生まれの間で、兵役経験は中・高等教育を受けた人の移行タイミングに遅れをもたらし、順序を狂わせたとしている。また、福島調査の結果も、同様の傾向を指摘している。NFR 調査では兵役経験の情報は得られていない。しかし、中・高等教育者のタイミングの逸脱が、兵役経験によってもたらされたものである可能性は高いと思われる。

つぎに、本研究で明らかになった、30s 男性の低い離家普及度（69.5%）である。新宿調査では、20s が 70 %、30s が 85 %、40s が 80 %と報告されており、必ずしも 30s が低いわけではない。このことについて、報告書は 20s は東京出身者が多いので低く、逆に 30s は地方出身者が多かったので高いとの解釈を提示している。福島では、20s から順に、80.5、75.0、73.3 となっており、30s は確かに 20s よりも低い、40s 以降も下がっていく。30s に注目していえば、新宿において高く、福島において低いというのは、かたや人口が流入する方である大都市と、かたや流出する方である地方都市の違い、つまりサンプル・セレクション・バイアスである可能性も否めない。いうまでもなく、回顧調査では、大都市では地方から出てきた人、地方では残った人しか対象にならないからである。

その点、全国サンプルである NFR 調査はそのようなバイアスは、まったくないとは言

い切れないが、相対的に小さいものとみなせよう。静岡調査では、離家経験率の数値が提示されていないので比較はできないけれども、ほかのコーホートでは90%を超える一方、1928～34年生まれにおいてはこれに満たなく、また経験年齢が高いことが報告されている。正確な判定を下すことはむずかしいけれども、30sコーホートの離家普及度が低かったと考える根拠はなくはない。すなわち、30sコーホートが卒業・就職した1950年代は、戦地帰りの復員兵などが多く労働力過剰であったこと、また、戦災で親を亡くしたりするなどの歴史的状況により、20sや40sと比べて、離家の普及度は低くおさえられたと考えた方がよいかもしれない。

出来事の順序に関してはどうか。静岡、新宿、福島いずれのデータも、卒業→就職→結婚が9割を超えていることが確認され、さらに、卒業と同時の就職も大多数であることを表している。とくに、卒業と同時に就職するというパターンの定着については、新宿調査、福島調査ともに、男性では30s以降、女性では40s以降多数を占めるようになったと報告されており、これはNFR98データの傾向と一致している。新宿では、男性は30sの4分の3、女性では40sの6割がこれにあたり、福島では、男性30s以降8割前後に、女性では40s以降7割を超えた。この、卒業後間断のない就職は、40sコーホートが卒業した1960年代に、職業安定所を通じて大規模繊維産業に就職していった中卒女子が先鞭となったという（苅谷ほか、2000）。NFR98の40s以降のコーホートのパターンも、このような動向に沿ったものだと考えてよかろう。その問題の40sの動向については、静岡、新宿、福島のいずれも、学歴や出身階層別の観察を行っていないので、比較する材料がない。その意味で、NFRデータで、このコーホートの農家出身の中卒者の移行行動を析出したことは、今回の分析の成果の一つとってよいだろう。

女性における、結婚にともなう離家が標準化してきた傾向について検討しよう。新宿調査では、卒業、独立、離家が別年に経験される割合が30sコーホート以降減った、逆に言えば、結婚離家が減ったということ、また、40sコーホートで、初婚離家が少し減り、就職離家が微増したことを報告している。また、福島調査では、30sまでは、結婚と同時の離家が3分の2以上であったが、40s以降、結婚と離家が分離したと報告されている。こうした傾向は、NFR98データの分析結果と大きく矛盾はしないものの、まったく一致するわけではない。その理由は、これらの先行研究では社会経済階層や学歴別の観察を行っていないからであって、その点では、今回の分析ではコーホート内のバリエーションを明らかにし得たと考える。さらに、NFR98データで得られた50s・60sの動向は、新宿・福島調査が明らかにした女性の離家動向のその後を伝えるものといえよう。

以上の検討結果から、今回の分析で得られた知見は、先行ライフコース研究のそれとおおかた一致するものといえてよいだろう。そして、今回は、成人期への移行の詳細を社会構造、階層変数との関連で明らかにしたところに、あらたな知見が付け加わったといえよう。とくに、戦後の基幹労働力となった中卒者、高卒者の動向を析出したことの意義は大

きいと考える。

さて、本章の分析で明らかになった、成人期への移行出来事のタイミングと順序の様相は、戦後の家族とライフコースの変動とどのようにかわるのだろうか。ここでは、離家を中心に取りあげてみたい。というのも、直系制家族から夫婦制家族へ（あるいは世帯現象としての核家族化）という戦後の変動図式を評価する上で、離家は重要な出来事であると考えられるからである。そして、近年の青年と家族の研究が明らかにしているように、成人後の子が離家せずに、親に長期に依存するという現象が、日本のみならず、欧米でもみられるようになってきている現在、今後の家族のゆくえを占う上でも、重要な観点になると考えられるからである（宮本, 2000）。

さきに紹介した新宿・福島調査では、長男／非長男、あととり／非あととり間の比較を行っており、長男またはあととりのほうが常に離家経験率が高いという結果が出ている。とりわけ、福島の 30s コーホートでは、あととりが 52.4 %であるのに対し、非あととりが 97.6 %と、著しい違いがあった。NFR98 データでは、きょうだい数が多いほど、離家の普及度は高い傾向がみられた。福島調査の報告書でも指摘されているように、これは、伝統的家族規範の作用の結果であると解釈できる。一子残留型の直系家族では、あととり以外の成員をスムーズに離家させることが重要な発達課題だからである。

最近解明された「核家族化の真相」として、1925 ～ 50 年生まれの人口転換世代の非あととりたちが、あととりを田舎に残し、都市に移動して核家族をつくったといわれている（伊藤, 1994；落合, 1997）。高度経済成長期の、雇用労働市場および外部社会からの強力な吸引力は、伝統的家族や村落社会での人口統制や成員配置の問題解決に都合よく働いた。その意味で、産業部門と農村の家族戦略は適合的であったといえる。このように考えるとき、離家が個人のライフコースと家族の双方にとってどのような意味づけをもって体験されたかを知ることがマクロな家族変動とミクロな家族生活史を結びつける上で重要になってくると思われる。

高度経済成長期の離家が、夫婦家族のイデオロギーによって正当化される物理的条件としての核家族世帯をもたらすきっかけをつくったのだとすると、家族イデオロギーと現実の家族行動の関係を考えるとき、そこに階層的な条件がどのように作用したのかの理解が欠かせないと思われる。農家出身のブルーカラー層の核家族世帯創設の事情は、ホワイトカラー層のそれとは明らかに異なっていただろう。後者は確かに、欧米の夫婦家族観を体現しようとしたかもしれない。しかし、前者は、むしろ生存戦略にもとづく労働力配置、成員の排出という現実的な要請の中で、核家族化を進めた。

夫婦家族理念ないし近代家族イデオロギーが、上層から下層へという流れで浸透したとするなら、戦後の核家族化現象の担い手となった、人口転換世代を構成し、その一部に団塊の世代を含む 40s コーホートの、とりわけ農家出身者たちのライフコース経験は、高度経済成長と近代家族イデオロギーの浸透の中で、いったい何を感じ、どのような家族ラ

イフスタイルを実現させてきたのか。少なくとも、ホワイトカラー層では夫婦家族を体現にあたっての障害は相対的に小さかったと思われるのに対し、ブルーカラー層では、ある種の痛みの中での選択であったことは間違いない。なぜなら、あととり以外の成員たちがスムーズに離家することができた後に、あととりさえも外部社会から吸い出されるような事態がまもなくやってきたからである。

高度経済成長が終わり、第一次産業の比重が極小化し、一億総中流意識の中で、だれもが愛情重視の夫婦家族にさほど困難もなく乗り換えられたような錯覚さえ感じさせる今日、上述のような、戦後の基幹労働力でもあり、また家族変動の直接当事者であったコーホートの存在は、ややもすると忘れられがちである。しかしながら、戦後の家族変動を理解するためには、その存在を掘り起こしておくこと、より一般的にはいえば、家族とライフコースの階層格差を跡づけておく必要があるだろう。

6. まとめと残された課題

5つの出生コーホートを通じた、成人期への移行出来事のタイミングおよび順序の比較分析から得られた知見を箇条書きにまとめておこう。

- ・人口転換期世代と団塊の世代を含む、40s コーホート（そして 30s の一部）の成人期への移行には、出身階層、学歴、労働市場参入の状況が差異をもたらしたことがわかった。
- ・高階層出身の高学歴者は、卒業・就職ではなく、おそらくは進学にともなう離家、あるいは結婚にともなう離家が特徴的である。結婚離家の傾向は 60s 女性でますます顕著になった。
- ・出来事順序としては、卒業と同時に就職するパターンがとくに 40s 以降一般化した。
- ・結婚と同時の離家が増えた。階層的には、卒業就職がらみは低階層、結婚がらみ、卒業・就職・結婚のどれとも同期しない離家は比較的高階層の特徴である。
- ・高度経済成長期に卒業した 40s コーホートのうち、農家出身の中卒者は、卒業と同時に就職・離家する傾向が高かった。
- ・多いきょうだい数は、戦後に生まれ高度経済成長期以後に成人した 40s 以降のコーホートにおいて、相対的に低い学歴、早い卒業・離家の要因となった。

残された課題としては、前節で述べたような、家族変動とライフコース移行の階層差について、仮説検証型の研究を行うことが必要であろう。今回は、得られたデータから抜き出せる知見をできるだけ多く抽出するという調査報告書としての要請がまずあったため、データの扱いは比較的単純で、しかもすべてのサンプルに目配りしながら、基礎的な資料を提示する必要があった。10年コーホートを採用したのもこのためである。今後は研究課題にみあったサンプルの絞り込みをするとともに、多変量解析を採用して、変数の主効果、交互作用を識別する必要があるだろう。また、長期的には、NFR98 データを補完するべ

く、たとえば、地域移動キャリアなども含めたようなデータ・セットを構築することが欠かせないと考えている。

注

- (1) 本章では、成人期への移行を直接の対象にすえているが、これには定位家族からの自立という接近もまた可能であるが、NFR98 データでは家族キャリア上の出来事変数としては離家と結婚しかない。

ところで、成人期という概念自体が、近年ヨーロッパ先進諸国において議論の対象となっている。そこでは、たとえば、成人という地位とはいったい何か、あるいはそれはどのようにして達成されるのか、成人期への移行には、個人の発達のみならず、それと家族移行、家族とほかの社会制度や国家、個人と家族や国家とのあいだに、どのような複合的な関係が存在しているのか、それらは相互に調和しているのか、それとも対立やずれがあるのか、といったことが問題になっている (Jones and Wallace, 1992)。日本においても、晩婚化や離家の遅れ (いわゆる「パラサイト・シングル」) が進展してきており、この概念について考え直さなければならない時期に来ていると考える (宮本, 2000)。とはいえ、本章ではとりあえず、従来成人期への移行を構成するとみなされてきた出来事経験そのものに焦点を合わせているので、この議論には深く立ち入らない。むしろ、本研究の提示する資料が、そうした議論のための材料となることを期待したい。

- (2) ホワイトは、出来事のタイミングと順序とを、出来事の生起そのものとともに、配列 sequencing を構成する 3 次元に含めている。この議論はそれはそれで納得がいくのであるが、しかしながら、この提示を行った本の別の章では、配列をむしろ順序と同じ意味で用いており、概念上の区別がわかりにくい。本章では、モデルやホーガンなどが用いた順序のほうを採用する。なお、ホワイトは、タイミングのほうは個人の年齢、持続期間、歴史時間上の日付の 3 側面に分類している (White, 1991)。

- (3) 成人期への移行、ないし定位家族からの自立局面を形づくる出来事のタイミングや順序には、まずもって当該家族の (実際にはその代表者である親ないし保護者のとる) 集合的な戦略が多かれ少なかれ関与している。そればかりでなく、子どもの自立にとってきわめて重要な、就職やそれに先立つ卒業といった出来事が一義的にはそれぞれ家族以外の制度領域に属しているために、そうした教育や労働市場の状況は当該個人を介して家族に調整や適応を迫る外的圧力として作用してくる。一方、そうした市場原理の中での選択メカニズムとは別に、子どもの自立には、その当事者である子ども自身にとっても、また自立させる側である親にと

っても、タイミングや順序の社会規範が存在すると考えられ、親も子どもも、ときには自分たちのニーズや資源の保有状況を見無視してまでも、そうした規範の定める時刻表に自らを合わせることを期待される。このように、家族における子どもの自立局面は、ミクロな観点からは個々の家族や個人にとってのそれまでの生活史の集大成としてどのような意味合いをもつか、そして、マクロ的にはある時代や地域の家族制度がどのように成り立っているか、すなわち、家族および個人のライフコースの発達やその歴史的变化に対する切り口としては、きわめて重要であるといえる。上述の観点にたったとき、昭和中期以降のわが国の家族における成人期への移行の生活史も、上述のような諸要因が複雑に絡み合った結果として紡ぎ出されてきたはずであるが、その様相は必ずしも十分に知られているとはいえない。

- (4) 詳細にみれば、20s 女性の約 7 %は結婚前に親なりを経験しており、これは無視できない割合ではあるが、今回は見送った。
- (5) もとより全国家族調査のデザインの中で与えられた、回顧的な出来事経験の測定記述のスペースがきわめて限られていたために、成人期への移行を構成する家族移行出来事として重要な離家の過程については、最初の経験しか得られていない。また、これらの独立変数群をみても明らかのように、NFR98 データでは利用可能な変数にかなり制約がある。とりわけ生殖家族要因としてほしかった、出生順位および続柄についても、調査時点の情報しかわからないので使用を断念した。また、各変数のカテゴリー設定（コーディング）は、特定の根拠があるわけではなく、たんに各カテゴリーがクロス集計に支障のないサンプルサイズになるように設定したものである。
- (6) この処理の是非については議論が分かれるところだろう。親の寿命も離家経験の規定要因であると考えれば非該当者は除外すべきである。一方、離家タイミングの年齢規範をより重要視するならば、離家年齢の分布は親の寿命にかかわらず一定のかたちを示すものとみなし、親を亡くした時点までの未経験としてあつかった方がよいと思われる。本章では、これらのどちらかの議論を退けるという立場はとらないが、むしろ、サンプル規模確保の観点から後者を採用した。
- (7) 回顧データで生存時間データの検定・分析をするためには、過去の抜け落ちサンプルが現存サンプルの傾向に影響しないという強い仮定をおかなければならない。パネルデータのように抜け落ちの特定ができないからである。回顧法による NFR98 データにおいては、現在のサンプルを抽出する時点で、死亡や転出などによってかなりの抜け落ちが発生しているとみるべきである。
- (8) もっとも、学校制度すなわち社会規範の時刻表どおりには運ばない理由を探るのもタイミングの分析の重要な意義ではあるが、これを行うにはどうしても多変量解

析が必要となり、それは本稿の課題を超えるので、機をあらためて取り組むことにしたい。

- (9) 参考までにガンマ係数をあげておくと、男性では 20s から順に+0.53、+0.51、+0.55、+0.56、+0.52、女性では+0.66、+0.56、+0.56、+0.44、+0.41 である。
- (10) 「初等・農林漁業」階層の女性（その多くは農家出身者とみなしてよい）の就業普及度が低いのは意外であるが、その理由として、たとえば離家するまでの家の農業手伝いを仕事とは回答していないという可能性もありうる。もともと NFR 調査では「仕事」とは収入をとまなうものという限定があるので、こうした潜在的な家族従業者が含まれてないというのはバイアスではなく、調査票設計上の問題である。
- (11) 結婚タイミングの規定要因については、ほかの章で詳しく論じられるので、ここでは補足にとどめたい。総じて、卒業、就職、離家に比べると、弱い関連しか見いだせなかった。学歴では、50s・60s 男女に、高等教育者の結婚の遅れが、また、出身階層では、60s 女性にのみ、高いほど遅い傾向が認められた。きょうだい数、15 歳以前の父死亡有無との関連は見いだせなかった。
- (12) 成人期への移行順序を日米で比較した先行研究によると、日本は出来事の順序についての規範が米国よりも強く存在しているとの推論が提示されている (Hogan & Mochizuki, 1985)。
- (13) たとえば、ホーガンは、卒業→就職→結婚の Normative(標準=規範的)、結婚が卒業に先行する Extra-Nonnormative、それ以外の Intermediate-Nonnormative の 3 つを区別しているが、その場合の Normativeness はアプリアリなものである (Hogan, 1981)。ところで、ホワイトは上述のホーガンの尺度 (ホワイトは Timing Order Scale とよぶ) に加えて、かれ自身のキャリア同調性尺度 (Career Conformity Scale) を提唱しているが、ここではとりあえずホーガンの TOS 尺度を採用し、CCS 尺度による分析については、その評価も含めて、今後の課題としたい (White, 1991)。
- (14) 静岡調査については、森岡・青井 (1987) の、次の各章を参照のこと (掲載順)。
- 指田隆一「出来事のタイミングとコーホート差」(pp.61-73)。
- 島内憲夫・北村薫「兵役と成人期への移行」(pp.137-152)。
- 池岡義孝「兵役体験とライフコース」(pp.152-178)。
- 望月嵩「成人期への移行」(pp.311-326)。
- なお、静岡調査のコーホート構成は、1918-22 年生、1923-27 年生、1928-32 年生、1933-37 年生の 4 つ。対象者は被用者の男性のみである。一方、新宿、福島調査の対象コーホートは、1914-18 年生、1924-28 年生、1934-38 年生、1944-48 年生、1954-58 年生の男女である。

文献

- 安藤由美, 1998, 『激動の沖縄を生きた人びと——ライフコースのコーホート分析——』, 早稲田大学人間総合研究センター.
- Elder, Glen H., Jr., 1985, "Perspectives on the Life Course," in Glen H. Elder, Jr.(ed.), *Life Course Dynamics: Trajectories and Transitions, 1968-1980*, pp.23-49, Cornell University Press.
- 浜島信之, 2000, 『多変量解析による臨床研究 [第3版]』, 名古屋大学出版会.
- Hareven, Tamara K., 1978, "Historical Study of the Life Course," in Tamara K. Hareven(ed.), *Transitions: The Family History and the Life Course in Historical Perspective*, Academic Press.
- Hogan, Dennis P., 1981, *Transitions and Social Change: The Early Lives of American Men*, Academic Press.
- Hogan, Dennis P. and Takashi Mochizuki, 1985, "Demographic Transitions and the Life Course: Lessons from Japanese and American Comparisons," Paper for the Annual Meeting of the American Sociological Association
- 伊藤達也, 1994, 『生活の中の人口学』, 古今書院.
- Jones, Gill and Claire Wallace, 1992, *Youth, Family, and Citizenship*, Open University Press (宮本みち子監訳『若者はなぜ大人になれないのか』新評論, 1996).
- 菊谷剛彦・菅山真次・石田浩(編), 2000, 『学校・職安と労働市場: 戦後新規学卒市場の制度化過程』, 東大出版会.
- 正岡寛司・藤見純子・池岡義孝・大久保孝治・安藤由美・嶋崎尚子編, 1990, 『昭和期を生きた人びと — ライフコースのコーホート分析』, 早稲田大学人間総合研究センター.
- 正岡寛司・藤見純子・佐藤友光子・嶋崎尚子・西野理子・中村賢子編, 1991, 『昭和期を生きた人びと — ライフコースのコーホート分析 地方都市編』, 早稲田大学人間総合研究センター.
- Mayer, Karl Ulrich and Nancy Brandon Tuma, 1990, *Event History Analysis in Life Course Research*, The University of Wisconsin Press.
- 宮本みち子, 2000, 「社会変動下の「若者と家族」研究の展開と方法: イギリス青年社会学を中心として」, 日本家族社会学会編『家族社会学研究』12(1) 95-109.
- 森岡清美・青井和夫(編), 1987, 『現代日本人のライフコース』, 日本学術振興会.
- Modell, John, Frank Furstenberg, Jr. and Theodore Hershberg, 1978, "Social Change

and Transitions to Adulthood in Historical Perspective," in Michael Gordon (ed.), *The American Family in Social-Historical Perspective*, St. Martin's Press.

落合恵美子, 1997, 『21世紀家族へ [新版]』, 有斐閣.

SAS 出版局, 1993, 『SAS Technical Report J-117 SAS/STAT ソフトウェア : LIFETEST, PHREG プロシジャ』.

White, James M., 1991, *Dynamics of Family Development: A Theoretical Perspective*, The Guilford Press (正岡寛司・藤見純子・西野理子・嶋崎尚子訳『家族発達のダイナミクス』ミネルヴァ書房, 1996年).

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-1

家族形成のダイナミクス

Dynamics of Family Formation

加藤 彰彦 編

2001年3月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会